

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



神奈川大学21世紀COEプログラム 第1回 COE国際シンポジウム

COEプレシンポジウム

「版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出」

日時：2005年11月20日(日)10:30~12:00、13:30~16:30
会場：神奈川大学横浜キャンパス セレストホール
内容：基調講演 木下直之(東京大学 教授)
「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」

各発表、パネルディスカッション 司会 北原糸子(神奈川大学 講師)

「『名所江戸百景』における構図の新解釈」
原信田實(国際浮世絵学会会員)

「変貌する明治の図録」
鈴木廣之(東京文化財研究所 東洋美術室室長)

「内田九一の西国巡幸写真」
金子隆一(東京都写真美術館 専門学芸員)

「アマチュア写真家徳川昭武が見た世界 私的写真をめぐって」
斉藤洋一(松戸市戸定歴史館 学芸員)

「見える民族、見えない民族 『輿地誌略』の世界観」
増野恵子(早稲田大学 講師)

COE国際シンポジウム

「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」

日時：2005年11月26日(土)~27日(日) 10:00~17:00
会場：神奈川大学横浜キャンパス セレストホール
内容：基調講演 川田順造(神奈川大学 教授)
「非文字資料から見る人類文化」

セッション
「記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃」

セッション
「身体技法と祭祀芸能 宗教者の動きと人形の動きから」

セッション
「民具と民俗技術」

セッション
「非文字資料の情報化と教育」

日・英・中 同時通訳

同時開催 企画展示

「浮世絵における常識と非常識 復刻版でみる『名所江戸百景』」

日程：2005年11月18日(金)~30日(水)
会場：神奈川大学横浜キャンパス 常民参考室

主催：神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」

刊行物や催し物については該当する
各所にお問い合わせください。

▶ 045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究所(内線4024)
中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務局(内線3532)

COE新刊案内

調査研究資料2

『図像文献書誌情報目録』

近代の大量印刷された出版物に復刻・翻刻・再録等された図像資料の書誌情報。各資料がどのような機会にどの文献に再録されたかを知るための目録。

2005年3月発行、A4判 409ページ。

編集：人類文化研究のための非文字資料の体系化 第1班
発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議



日本常民文化研究所

『水産総合研究センター所蔵古文書目録』

千葉県(房総半島沿岸地域)関係史料

2005年3月発行、A4判 136ページ。

編集・発行：
独立行政法人水産総合研究センター
神奈川大学日本常民文化研究所



常民資料叢書『紀州小山家文書』

2005年4月発行、A5判 418ページ。

編集：神奈川大学日本常民文化研究所
発行所：日本評論社 定価(本体8,000円+税)

歴史民俗資料学研究所

『対話する歴史と民俗』

歴史民俗資料学のエチュード

研究所創立以降10年間に作成された修士論文を基礎に書かれた10本の論文を収録。

2005年3月発行、A5判 260ページ。

編集：歴史民俗資料学研究所
発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議



外国語学研究所 中国言語文化専攻

ワークショップ「袷の儀礼と技法」

日時：2005年7月23日(土) 13:30~16:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス17号館 215会議室

報告：「呉越神歌の文化史意義 袷の儀礼からみた」

顧希佳(杭州師範学院 教授)

：「追儺儀礼における方相氏の役割の変化」

アレクサンドル・グラ(立命館大学 専任講師)

コメンテーター：廣田律子(神奈川大学 教授)

企画・主催：外国語学研究所中国言語文化専攻

非文字資料研究 No.8

発行日 第8号 2005年6月30日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp>



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter

2005.6
No.8

CONTENTS

表紙写真説明



ブラックカントリーの景観

この写真は、イギリスのパーミンガム近郊、いわゆるブラックカントリーの現在の景観である。ブラックカントリー(地方)は、産業革命期、周辺に良質の石炭と鉄鉱石が産出し鉄鋼業が興隆した。また、18世紀後半、テムズ・セバーン・トレント川によって北海、大西洋が結ばれ、物資の運搬が容易になった。それらのことで中心都市のパーミンガムはイギリスで第二の都市に発展した。写真の左手には石炭を中央の水路より搬出するためのバッチャーがあり、右手には運搬用の道路が延びている。雲はあるものの空は青い。この炭田は、現在では、産業遺跡として跡地が博物館(公園)として開放されている。国によって歴史的景観の保存はその制度、手法が異なるが、イギリスでの産業遺跡の保存はその歴史的景観保存と同義で、空間そのものの保存である。そこで子供達は自らの民の歴史を学ぶのである。
(2004年8月・撮影 八久保 厚志)

巻頭言	3
中島 三千男 (神奈川大学副学長・COE拠点形成委員会委員長)	
対談	4
土地の記憶 人と建物が織りなす景観	
森 まゆみ×西 和夫	
研究エッセイ	ESSAY
特集：文字と非文字の間	
カモカモ(鴨々)について	10
コトからモノへの関心	
菊池 勇夫	
杭州に関わる二つのテーマ	12
大里 浩秋	
非文字資料としての	14
加賀藩検地絵図を読み解く	
田上 繁	
道教の符呪	16
道教儀礼史における非文字資料研究の可能性をめぐって	
丸山 宏	
フィールドノート	Field Note
納西族東巴教「求寿」儀式調査	18
夏 宇継	
コラム 対抗と交流	21
江 静	
海外博物館事情	Foreign Museums
ロシア	
自由と想像 ロシアの博物館展示が教えるもの	22
穆愷黛絲 (ムカイダイス)	
研究会報告	WORKSHOP REPORT
歴史研究と図像資料のデジタル化	24
孫 安石	
受贈資料一覧	26
主な研究活動	28
2005年度 研究担当者紹介	30
彙報	31
Report & Information	32

神奈川大学21世紀 COEプログラムの 巻頭言

巻頭言



神奈川大学副学長・COE拠点形成委員会委員長

中島 三千男

「総合学術研究推進委員会」の発足

本年4月より、神奈川大学の70有余年の歴史にあって初めて、神奈川大学の学術研究活動を総合的に発展させるための組織、「総合学術研究推進委員会」(以下「推進委員会」と表記)が発足いたしました。

神奈川大学は創立以来、「研究と教育の融合」を基本理念として、研究活動についても強い関心を払ってきましたが、特に1990年代の後半から、「神奈川大学の顔の見える研究」という観点から、その施策を、重点的・競争的なものに移す方向性を打ち出し、「共同研究奨励助成金」制度や「学術褒章」制度を設けてきました。

一方、大学はこれまで「教育」と「研究」を歴史的使命としてきましたが、今日においては、「社会貢献」なるものが、大学の「第三の使命」として位置付けられるようになりました。また、政府も21世紀を「知の世紀」と位置づけ、世界最高水準の「科学技術創造立国」実現を目指して、人材・予算等の重点的な配分を行うようになってきました。日本の大学にそれぞれの分野で世界最高水準の研究教育拠点を形成しようという、文部科学省の21世紀COEプログラムもまさにそうした意図から出されたものでした。

「推進委員会」は、こうした新たな課題に積極的に応えるためにも、法人の組織である、広報部・エクステンションセンターや産官学連携支援室とも積極的に連携をとりつつ、神奈川大学の学術研究活動を総合的に発展させていきたいと考えております。

「推進委員会」は学長の意を受け、学術研究担当副学長を委員長とし、大学院研究科委員長・学部長・担当事務局次長等により構成され、神奈川大学の学術研究活動の基本方針について審議します。さらに、その基本方針の下に具体的方策を審議する「研究委員会」を設け、これは各研究所長・センター長・担当事務課長等によって構成されます。また、COE拠点形成委員会をこの「推進委員会」の特別委員会とし、全学の学術研究活動の中での位置づけをより明確なものにしました。

「推進委員会」は神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」を神奈川大学における新しい学術研究活動の先導役として位置づけて、今後とも積極的な支援を行うつもりです。

COE関係者の皆様の一層のご努力を期待しております。



対談

森 まゆみ

作家 / 東京国際大学・教授

×

西 和夫

神奈川大学日本常民文化研究所・教授

土地の記憶 人と建物が織りなす景観

生活者としての視点

西 今日、20年余り地域雑誌「谷中・根津・千駄木」（通称、「^{やねせん}谷根千」）の編集に携わり、赤レンガの東京駅、上野奏楽堂のパイプオルガンをはじめ、東京に残る歴史的建造物の保存と活用にかかわってこられた森さんをお迎えしました。最初に、「谷根千」の紹介からお願いします。

森 子どもが小さい頃、子育て仲間のお母さんたちと谷中の町を回ったときに、木の電柱とか昔のゴミ箱、瓦屋根の民家など古いものが残っていることに気がきました。図書館で調べても私家版「谷中今昔」以外の資料はなく、自分の住む町のことを調べようと思いました。

西 浅草や銀座などと違い、普通の町の普通のことというのは文字化されていないし、資料を自ら発掘し、住む人から聞き取るしかない。

森 とにかく古い話を聞きました。その一方、古い家がどんどん壊されていくのを傍目に見ながら、記録化だけではなく建物、大木、お稲荷さんなどを残す運動にならないかと考え、1984年に地域雑誌「谷根千」を仲間3人と創刊しました。最初は「今までの一生で何が一番印象的でしたか」といった馬鹿な質問をして70～80代の話者を困惑させました。

そのうちに地域の地図、年表が自分の中に出来上がる。地元の事件、戦前ですと上野動物園の黒豹が逃げて大騒ぎになった黒豹事件、戦後では谷中五重塔が昭和32年に心中事件で炎上消失、昭和47年日暮里駅で起きた列車事故などの町の事件。時間と空間が合わさると相槌を打っ

てくれ、聞取りがスムーズにいくようになりました。

西 最近では、地域学・地元学が流行で関心が高いですが、当初は、手探りの状態でご苦労も多かったでしょう。

森 「日暮里花見寺」という記録を私家版で刊行した老人、日暮里や小島町では住民自らがお金を出し合い町会の記録を作るとか、先例があったのです。日暮里史談会、根津史談会もありました。個人的な話の場合はよいのですが、多くの人から話を聞いた場合、記憶違い、また人の批判も出る。事件を追及するメディアではないのですから、当事者が一番輝いていた時代の喜び、仕事の思い出や苦労話を聞いて記事にする。しかし、どうしても生活圏内での記事ですからよく書いても、悪く書いても何か言われる。その煩わしさを乗り越えないと地域活動はやっていけません。今コミュニティが崩壊したとか言われますが、違う形で再構築しないと楽しい生活はできない。古い住人だからと威張るのではなく、昨日来た人も今日から住み始めた人も同じ住人として平等です。どっちみち人間一人では生きてはいけないのだから、必要なときは手を携えて、多少迷惑をかけることを恐れずに関係を作る必要があると思ったのです。

地域の情報センター・「谷根千」

西 他のいわゆるタウン誌と差異化を図る意識はあったのですか。

森 老舗紹介とか、文化人との対談を載せるタイプではなく、ふつうの住民と双方向の情報メディアを目指しま

した。聞き取りというスタイルで取材し、地域の人の言葉で載せる。「あの記事は間違っている」、「なぜ取材に来ないのだ」と言われることもあります。私たちはただ仲介者の立場ですから、不忍池地下駐車場、上野駅建替えなど自分の意見でなく読者の意見をきちんと載せる。スペースが少ないから何を取るかで多少主観が入りますが...

西 刊行の経費や運営はどうしたのですか。

森 当初は3人で費用を拠出しました。趣味・道楽なのか、仕事なのかとよく尋ねられました。大手ゼネコンが開発地域にタウン誌を配ったり、老舗のれん会が金主のケースがありますが、生活者の町の雑誌ではそうはいきません。自転車操業ですが、地域の小さな仕事として区役所職員の労働報酬くらいは得てもいいかな、と思います。何しろ、子供を背負い朝から深夜まで毎日働くのですから(笑) やがて事務所も確保でき、不忍池の会・酸性雨研究会・赤レンガの東京駅の会の集会場ともなった。場ができる人と情報が集まります。飲食店の評判から教育相談まで、ありとあらゆる情報が持ち込まれる中に、建物の取り壊しの話なども耳に入る。

西 一種の地域情報センターですね。

森 多くのタウン誌・地域雑誌が資金不足や仲間割れで消える中で、私たちはローカル・ヒストリアンという誇りを持ち続けました。地域雑誌はある程度の余裕を持って取り組まないと続かないですね。栃木の「うずまっこ」、神楽坂の「ここは牛込、神楽坂」、愛媛県の「ジ・アース」も編集者が重労働で亡くなりました。

対談

“ローカル・ヒストリー”ということ

西 その中で20年。精神的にも肉体的にもタフでないとい...。“ローカルヒストリー”を「谷根千」の編集コンセプトとして貫いてこられたわけですか。

森 郷土史というと何かイデオロギーが入る気がして。そして、退職されたお年寄りが寺の山門のいわれを調べるとか、古文書を読むイメージが浮かびます。歴史を掘り起こす仕事の方、今生きている人や町の未来にどうつながっていくのかを考えたい。

西 普通の人たちに普通の生活を語ってもらうのは難しいですね。

森 職人さんは口が堅くて、何聞いても「別に...」。話にならないから何度も通い、いろんな角度から聞く。鳶の頭が手拭で弁当を器用に包んで帰るのを見て、職人さんの話やしぐさも残さなくてはと痛感し、夕方の文化放送で「サウンド・オブ・マイスター」という5分番組をイナックスの提供で始めました。文字記録だけではなく、長年付き合ってきた寿司屋・植木屋・大工さん・三味線作りの職人さんの音と声を今取っています。

西 ラフカディオ・ハーンの本を読むと当時の音が聞こえてくるようです。言葉で音を残すのは難しいです。

森 空襲体験も聞いています。谷中は昭和20年3月4日に空襲を受け、焼けたところも多いし、爆撃で相当の人も死んだ。両親は東京大空襲で焼け出され、焼け残った動坂下の長屋で所帯を持ちました。日当たりの悪い、虫の出る15坪の長屋でした。焼け残っていたからですね。



地域雑誌『谷中・根津・千駄木』

対談

西 人間と同じように建物も生き物だから古くなれば世代交代がありますね。地域の歴史は人間の歴史だけではないわけです。

ヒューマン・スケールの地域

森 自分としては物書き、文筆家になるうとは思わなかったのですが、「谷根千」に載せ切れず、涙を呑んで切った資料を基にして、「谷中スケッチブック」、「不思議の町根津」、「鷗外の坂」、「一葉の四季」、「明治東京騎人傳」などを本のかたちで出しました。

西 雑誌「東京人」には、居酒屋のことを連載されていますね。

森 えー、そんなものまで読んでいますか！（笑）

西 飲み食いから地域を捉えることもできますね。

森 貧乏な頃にコロツケ屋さんでコロツケを子どもに一つずつ買ってやれず、頼むと白い薄い紙に一つを半分ずつ入れてクルクルと巻いてくれました。そうした、二つに分けるという考え方や包装紙、包装の仕方も記録しておきたいです。塩を7種類も置いてある食料品店が谷中にはあります。7種類の塩を使い分ける主婦がいるのです。

西 そういう生活の中で、いろんなことを繋げている。

森 「谷根千」事務所の会合では、料理を作る暇がないから、先に来た人にお金渡して谷中銀座で惣菜を買ってメニューを組み立てる。おぼろ豆腐、やきとり、おやき、貝の刺身、コロツケとか、あそこであれを買ってこれを買って、でんぷんが足りないとか言ってお稲荷さんを買って、お酒を買って帰る。ゲームみたいで若い人は楽しん



西 和夫
神奈川大学日本常民文化研究所・教授

でいます。生協とか通販の町の関係の仕方と違う。無農薬、安全なものを食べようと思うとその関係の車が地域の中にしょっちゅう入ってくる、なおかつ地域の商店街にはお金が落ちない。私は多少安全で無くてもいいから町で買おう、お金を落とそうと考えています。

西 その辺も地域に根差しているわけですね。

森 買い置きしないから家の冷蔵庫には何も入っていない。冷凍食品など食べたことがない。毎日、買い物ができる町に住めるのは幸せだと思いますね。

西 神奈川大学の近くには、京都の錦小路に負けないという六角橋商店街があります（笑）

森 そこで四方山話をするのが大事ですね。コンビニとかスーパーだったら黙ってカゴに品物を入れレジに並びお金を払うだけ。谷中銀座にいくと「森さん、久しぶりだね」とか、「少し太ったんじゃないの」とか話ができる。お年寄りもそんな会話ができなくなったらボケるのも早いと思うのです。

西 今はいわゆるシャッター街になりつつある町も多くなりました。

森 荒川区汐入では白髭西の防災という都市計画のため長屋を壊し住人をビルに移した。すると階下に降りるのが面倒臭いという。隣近所がなくなってしまった。最初の年に盆踊りを見に行ったら地面の代わりにベランダで送り火を焚いている。わが町では迎え火や送り火をまだ焚くし、籠に乗せた果物とかも売っている。なにか大事なものはそのあたりにあるのではないのかと思います。

住民による建物保存運動

西 古くなった、経済性、採算が合わないからとか、家を壊す論理は非常に明快ですが、保存しようとする場合、論理をしっかり打ち立てないと対抗できない。

森 私は歴史的近代建築の保存運動にかかわるより、町の小さな建物の取壊しに立ち会った回数をはるかに多い。取壊しの確認申請が出る前に、調査に行き、保存を訴え、壊すときには不要なものをもらってくる。谷中の吉田屋酒店（P8 写真参照）という明治44年築造の商家ですが、三崎坂の坂上にあつて地域住民にとって原風景になっていた。家主、住民、台東区役所、芸大の先生が一致協力して100メートルばかり離れた都有地に移築保存し、台東区の歴史資料館付設展示場という形にしました。帳簿や徳利などの民具、1万数千点の庶民生活資料も一緒です。

対談



森 まゆみ
作家 / 東京国際大学・教授

今なら登録文化財という制度もありますが、その時は区的生活文化財指定になりました。地域住民の愛着と、行政・専門家の知識がうまく結びついた好例です。

西 明治・大正の建築物も民家を含め大事にしようという傾向が出てきましたね。登録文化財制度や景観緑三法など法律も整備されてきました。

森 この頃は近代建築はまだ「新しい」という感じでしたね、薬師寺だとか宇治平等院は残されるけれど…。

西 そんな新しい建物を残してどうするのだと議論しているうちに実は希少になってしまったのです。

森 吉田屋さんの近くには伊勢五さんと同じく酒屋があり、全部壊す予定が、店の方々の話合いで明治の蔵を残すことになりました。千駄木の安田財閥の安田邸は持主の理解、住民による文京建物応援団の活動もあり、日本ナショナルトラストに寄贈される形をとりました。地価の高い都心での保存には、法律家や税理士はじめ専門家の助力が必要です。

西 私のゼミでは森さんが書かれた『東京遺産』（2003年、岩波新書）を取り上げ、学生が選んだ建物を実地見聞し、コメントを共有する。森さんたちの行動力に学生たちは感心しています。

森 私はただ書き手に過ぎません。知恵ある参謀、よく働く住民、特技のある人々、学問的に跡付けてくださる方がいます。人と人のネットワークができたのです。建物の保存運動だけではなく、各種のイベントの計画でも、誰と誰を組み合わせれば映写会、講演会ができるとかの算段がつかます。マンション論争もそうですが、降りかかる火の粉を払うだけでは前進はなく、平時から活動して何か起こるとすぐに集まり、新聞社や建築学会に連絡するなど迅速な対応ができる態勢ができています。

西 各種の情報がすべて頭の中で整理され、人のネットワークをうまく形にしていけるところがすごいですね。

町並み保存・活用へ取り組む姿勢

西 町並み調査は調査で終わることはなく、地元の人と一緒に話をし、考えているうちにいつの間にか町づくりになる。建築学にも都市計画という町づくりの専門分野がありますが、住んでいる人、関心を持っている人がみない町づくりの専門家だと思います。町づくりは建築の問題よりも人間の考え、生活の仕方が問題で、それがうまくいかなるとだんだん町が壊れていく。そのとき何

が大事なかわからないという質問を受ける。大事な文化財は偉い人が決めてくれるもの、文化財ではないものは大事ではないという話になる。私はみなさんが大事だと思うものが大事ですと答える。

森 私はこれが美しい、大事だと思うけどあなたは？という意見を必ず聞く。美は主観的なものだから。

西 何を大事にするかは住民自身が関心を持つことが基本で、行政サイドの文化財指定だけが価値判断の基準ではない。私が今進めている平戸、島根県の江津、長野市松代町、長崎県壱岐勝本浦の町並み調査と町づくりの活動でも、そこを出発点としている。

森 18年前谷中の人に、どこで生まれ、どんな所で何をして遊び、どこに木があったとか、この道は何と呼んでいたとか、何が好きかと聞いて、青焼きの地図に落とし、一番好きなもの調査をしました。お寺が静かで落ち着くとか、読経の声を聞くのが楽しみだとか、お茶を煎る匂い、畳屋さんの前を通る時の匂いが好きだとか。一般に役所は、駅が近く、駅ビルに洒落たテナントが入り利便性が高い町を住みやすい町と言うが、住民はむしろ五感に訴えるところを好んでいる。歴史的に意味があるから保存という考えもあるけれども、今住む人にとって気持ちいい、居心地がいいという基準で、地域の古いものを大事にするという考えが出てくる。

西 調査では必ずお祭りに行く。見物人の段階を通り越すとあなたたちも何かやれということになる。建物の調査をしているので、そこからピックアップしてスタンプラリーを子供向けに設定したり、うちわを作って配って

対談



谷中の吉田屋酒店(1910年築、移築後)左の写真は1941年(昭和16)当時。
森まゆみ著『東京遺産』(岩波書店、2003年)より。

みたり、夜には口ウソクを灯し人の歩きを誘導してみたり、得意な分野を生かして参加することになる。五感にかかわるものに触れないと町はわからない。建物の形、デザインだけの調査ではわからない。

森 なぜか建築と都市計画の人はばかりが町づくりに関係する。その土地の歴史性を無視して、妙に自己主張の強い建物を作ったりする。旦那衆がいる銀座でも今ごろになって建築系の人ばかり呼んでシンポをする。もっと違う視点、医療、介護、福祉、教育、文化をすえた特色ある町づくりがあってもいいと思います。

西 町も過疎化しています。空き家が増え、建物自体もどんどん駄目になり、世代的にもお年寄りが多くなって子どもの姿も見えなくなる。都市計画の人はそういうところに道路を通すことを譲らない。人がいなくなる町にそんな広い道路通してどうするのかと聞くと、決定済みだからという(笑)

森 一度決定されると行政は絶対ひっくり返らないですね。もっと小さな努力が大切です。島根県に行ったとき、小さなよろず屋さん、近所のお年寄りの生命線になっているのを見ました。そういう店を大事にして地域住民みんなで支えていく。私たちはBSE牛肉問題の時にはお肉屋さん特集を「谷根干」で組み、彼らの気持ちを聞き、地域の肉屋さんのバックアップをしました。

建築文化遺産の継承

西 かつて、建築物を保存するときに、現状で凍結したように残すという凍結保存という考えがあった。今はもう通用せず、むしろ活用の仕方が問題になっている。活かし方が提示できないと建物は残らないし、町も活性化しない。町並み調査の結果だけを示しても意味がない。調査者はデータを集め、論文が書けるが、地元には何のプラスにもならない。森 ほんとうにそうですよ。資料も借りっぱなし。

西 研究者が時々使う地元還元型、この言葉も驕りだと思う。調査は地元のためにやるのでなければ、迷惑以外のなにものでもない。森 素人として最初に保存という世界にかかわったときには、文化財とはお上が決めることで、迷惑をこうむる分、補助金が少々出ると思っていた。全国を回ってみてもいまだに

そう思う人が多いし、「重要文化財になると釘一本打てなくなる」という、釘一本伝説が強固に信じられている。

一方、行政側からは原型復元、建築当初の形に戻すという言い方を聞き、それにも違和感を持ちました。そうしたら後から住んだ人の生活の営みは何だったのかということになります。しかし、最近は少し変わりましたね。

西 変わりました。保存一辺倒から活用という考えが出てきましたから。

森 あとから付けられた張り紙や看板、柱の傷もそのままにしようとの考えが出てきましたが、だいたい保存が決まると行政当局はきれいすぎるほど修復、整備し、生活感のないものにします。

西 住人はそこに住めないから、新居に移り住み、建物は残るけれど生活臭が消える。

森 静岡県の蒲原で保存運動をやっている役場職員の片岡さんという女性は自分の家を文化財に指定するのではなく、古民家を建築家と相談し使いやすく直して住み続けている。泊めてもらったのですが快適でした。

西 自分が大事だと思ったものが大事、究極の文化財の考え方です。どんなに立派な建物でも文化財に指定されるまでは指定されていないのですよと言うが通じない(笑)

森 国宝とか重要文化財だから何でもすごい、という外からの基準にとらわれ、とらわれない真新しい目で見ると

とができない。

西 現代建築学では壊すときのことを考えて建てる考え方が広まってきた。ものの有効利用、使い捨てではなく再利用を最初から意識し、自然に害を与えない素材を調達する「グリーン調達」が提唱され、それがよい建築だという考え方があるのですが、私は疑問に思っています。特に「何々にやさしい」という言葉は疑わしい。学生には、今あるものを捨てないで活かして使うのが一番エコで、一番グリーン調達だと話しています。今日、建物を壊して捨てるのにもお金がかかるのです。

森 エコロジーというと、1992年リオデジャネイロ国連環境・開発会議がありました。熱帯雨林の減少、フロンガス、NO₂対策が問題となり、基準や目標が上から設定されてきましたがピンと来なかった。ボトムアップで考えていく。私たちは身近な直し屋さんを「谷根干」で特集した。傘の骨直し屋、洋服のサイズ合わせの店、まな板削り、鼻緒をすげ替えてくれる店を全部調査して、職人さんの仕事ぶりも書いた。捨てるのがもったいない、罪悪感を持つけれど、どこに行ったらよいか分からない人が多いらしく、とても反響がありました。

西 とまかく、建物の保存は、生活と密着しているだけに、住む人と地域の人々の考え方に拠るところが大きい。建物や町並みも人あつての建物であり、町並みであるからこそ、人の部分が歴史を経て分らなくなった場合も、建物や町並みから人の息づかいを読み取ることができるわけです。

次世代につなぐ生活文化

西 建物、家というのは本当に生活を包んでいますから人間の根本を作る。町を歩いて見える世界よりも、もっと直接人間をつくる。建物・町並み保存を我々だけの感覚で、古いものは大切だよ、歴史があるものは大事だよというだけではもう通じない。次の世代の人たちの考えをどう今後に繋げていくかを我々が考慮に入れておかないと…。鼻緒をすげ替えるといっても、その鼻緒を知らない。「戦争って本当にあったんですか」という世代が育ってきているのです。私など完全に旧世代、化石に近いほうですから(笑)

森 今日、学生に紋付とは何かと聞かれ面食らいました。逆に何も知らないことがメリットになることもあると思

います。私は古い家を見ると昔住んでいた家みたいで懐かしいと思うのですが、息子は「新鮮」と言うのです。新鮮と思う人たちが住めるようにするシステムが求められている。今のままだとお年寄りばかり残り、やがて空家になる。空き家に新しい人が入ったり、あるいは都市と田舎の交流に使えればいいなと思ったりしています。

西 保存というときにある程度の許容度を認めながら残していかないと無理ではないかと思えます。ある幼稚園の先生の話では、園児に木を描かせると、かつての子どもは幹があって上に枝と葉があるように描いた。ところが今は丸く描く。子どもたちの説明では、マンションの上から見ると、幹など見えないから丸く描くというのです。木を横から見たことがないわけがないけれど、日常風景として木を上から見ている。これと同じで、建物を見ている地元の若い人たちがどう考えるかが基本になる。研究者や建築家の一方的な保存の考えを押し付けてもうまくいくわけがないのです。

森 今日では、東京で木の家に住むなど条件的に出来なない。ずっと古い家に住んできた人で一度だけでも新建材の家に住んでみたい、マンションに住んでみたい、あるいはもう歳をとったから、狭くてもよいから風の吹き込まない家に住みたいという人もいます。でも逆にシックハウスはいやだから古い木の家に住みたいという人もいます。いま谷中では、若い人がNPO法人を作って、借りたい人と貸したい人のリスト、組み合わせをしています。いままでは、一軒の屋敷が持ちきれなくなり手放された土地を、建売事業者がミニ開発するのが一般的だった。その場合でも路地の真ん中に椅子や机を出してピヤガーデンにするなど、うまくコミュニティーが出来ているところもあります。

西 地域で培われた住み方の伝統が、そういう条件の中でも暮らしの工夫として生かされているわけです。

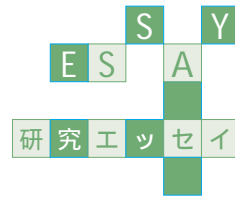
森 ミニ開発があると必ず、息子のために近所の人を買ったりするから。もともと近所にいた人の息子さんや娘さんが入ってくるとその地域の文化がそのまま転送され継承されていくわけです。

西 時間が来てしまいました。今回は、建築物、町並みの保存と活用と、ある意味では背反した問題を地域で取り組んでこられた森さんに具体的な話をお聞きし、大変参考になりました。

(2005年5月11日 COE共同研究室、聞き手：佐野賢治 記録：関ひかる・櫻村賢二)

カモカモ(鴨々)について コトからモノへの関心

菊池 勇夫 (COE共同研究員 / 宮城学院女子大学・教授)



1 玄米をはかるカモカモ

松浦武四郎の蝦夷地踏査日誌に記された和人のアイヌに対する「非分」の事例を読み直していたとき、『竹四郎廻浦日記』下にある次の記述が目にとまった。

先達て詰合細野某此辺を見廻りし時も、番人共のアツシー反を小のかもかも〔一升六合入〕一杯にて玄米と取かへしを、近頃其カモカモの小になりし事を〔当時一升二合ならで入らざるよし〕大に怒りて、土人共中々立行難き由を細野某へ歎願致し、同人の前にて番人を大に言込めしとかや〔細野某話し〕。(安政3・1856年8月29日条)

また、次のようにも記す。

扱其クナシリえ引とられて支配人等が所置は中々聞も忍びがたし。其一二をしるし置ば、シャリ・アハシリ両場所にて、夷人共よりアツシを織て持行、是を運上屋また番屋にて易る時は玄米を小きカモカモ〔一升二合位〕一杯にてかゆるよし。其アツシをクナシリへ廻し置て此方の土人共島にてアツシを無心する時は正銭六百文づゝの勘定になる(と)かや。(安政3年9月1日条)

以前から知っている箇所であったが、カモカモとはどんなモノなのか気になりだした。玄米をはかる枡のような用途の器物であるのは察しがつくが、皆目わからない。コトを論ずるにはさしあたり必要がないから、ふつうならモノに立ち止まらず前に進む。文字史料を素材に研究しているとそのような習性がおのずと身につしてしまうのだろう。コトのきびしいやりとりがモノを媒介になされていることに無頓着でいられないと思ったのは、本プロジェクトの「非文字資料」の研究に加えていただいたおかげかもしれない。

少し史料の状況説明をしておこう。 で武四郎に話し

てくれた細野某はモンベツ(紋別)御用所に詰める幕府同心細野五左衛門のことである。支配人・番人の横暴は許さないという考えの持主だったようだ。オホーツク沿岸地域およびクナシリ島は藤野喜兵衛の請負場所であつたようにアバシリ・シャリのアイヌをクナシリ島へ派遣して働かせており、それがアイヌ社会の疲弊の原因となっていた。ここではアツウシ(樹皮衣)と玄米との交換が問題になっているが、オホーツク沿岸地域はアイヌ女性によるアツウシの生産がさかんなところだった。手間隙がかかるアツウシの製作でありながら安く買い上げられ、その結果商人がいかにも不当な利益をあげていたことが告発されている。

武四郎は安政4年ナイフト(名寄)に泊ったさいにも、「アツシー反」を織って運上屋に持っていくと、「小きカモカモに米一杯」と交換してくれたことを記している(『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』下)。ただし、この場合には1杯といっても玄米3升5合であったというから、モンベツなどよりはいくぶんよかった。いずれにしてもカモカモをひそかに小さいものにして相手を騙し交換を有利にしようという手口は、シャクシャインの蜂起にいたった、1俵の容量をどんどん減じて8升にしてきた歴史を思い起こさせるものがある。それに気付き抗議しても無理・非道が罷り通ってきた現実は重たい。

2 近世史料からわかるカモカモ

寛政4年(1792)のソウヤ場所御救交易に同行した串原正峯の「夷諺俗話」に、「鴨々 カモカモといふは曲ものにて、黒く又は赤く塗り、夷用に仕込み、出羽の坂田にて造る にアツシ(アイヌ語)」とある記述が簡潔だが、要点が知られる(『日本庶民生活史料集成』第四巻) 補注者(高倉新一郎)は、カモカモについて「かも。檜、杉などの薄板を円形にわけ、合せ目を樺または桜の皮で綴ぎ合せた容器。わけもの。アイヌが水・酒などを運ぶのに珍重して求めた」と説明している。

曲物であることを裏付けるものにアイヌ語資料がある。

蝦夷通詞であった上原熊次郎の「藻汐草」(寛政4年跋文)および「蝦夷語箋」(嘉永7・1854年新刻)には「曲物の食籠」のことをアイヌ語でカモカモというのだとしている。また能登屋円吉撰になる「蝦夷語集録」(文久4・1864年)には、「曲物形物」の和語に対応させている。食籠(じきろう)とあるから、食物を入れる容器として使われたのが本来の用途なのかもしれない。「形物」は一定の様式のことを意味しているだろうから、カモカモといえはすぐにその形状が浮かんだであろう。

黒塗り・赤塗りについては、玉虫左太夫の『入北記』(安政4年)にホロベツ領のアイヌへの「売払物直段調」が載っているが、そこに黒のカモカモが380文、赤のカモカモが340文と出てくる。漆塗りでも黒塗りのほうが少し高かったことがわかる。

アイヌ向けの製品であるという点はよいとして、生産地を酒田としている点はどうであろうか。『蝦夷志料』五十四に「高橋三平筆記」を典とする「諸国御仕入物」が掲載されている。高橋三平(重賢)は前期幕領期最期の松前奉行である。蝦夷地向けの品物を書上げたものようであるが、酒田の箇所に「かもかも壱組三拾四文五分」とあって、酒田が直接の生産地とはいえないまでも仕入れの港であったのは確かである。酒田や最上川流域の史料を探せば何か手掛かりが得られるかもしれない。

文字史料的に比較的良好にわかるのはカモカモの売り値段である。アイヌ交易品の値段付けの史料は少なからず残っているが、前出の『入北記』が各場所の値段付けをよく調べて書いている。その一部を紹介しておくと、〔イシカリ〕2つ入り1組=夷俵1俵、〔ル、ルモツベ〕2つ組=煙草6把、〔西トンナイ、カラフト〕1組揃=2俵、大=煙草4把、中=同2把半、小=同1把半、〔シャリ〕3つ合組=米一俵、〔ネモロ〕3つ組(合力)1組=448文、大=164文、中=154文、下=130文、〔ウラカワ〕3つ子入1組=550文、〔ユウフツ〕2つ入1組=500文、〔シラライ〕1つ=300文、などとなっている。玄米1升の値段は1升56文のところが多いが、60文、80文のところもある。

カモカモの値段の他に、大・小の二つ組のもの、大・中・小の3つ組のものがあり、その1組の値段と、ばら1つの値段が示されているのは、そのどちらでも売られていたからだろう。このように各場所の交易品として出てくるから、アイヌ社会への普及度が高かっただろう。上下ヨイチ場所の万延元年(1860)の仕込品の書上げに、「鴨々五十組」とあるから、かなりの数量にのぼったことは確かである(『余市町史』第1巻)

3 絵のなかのカモカモ

それでは、近世後期のアイヌの生活文化を描いた絵画・図像資料にこのカモカモを見出すことができるだろうか。探しているうちに、松浦武四郎の「蝦夷漫画」(安政6年刊)・「蝦夷訓蒙図彙」にカモカモの図が載っているのがわかった。本プロジェクトの生活絵引きの作業をすすめていっさいに、こうした説明(名称)入りの図会・図説の類は大きな手助けとなるだろう。前者の図によると、黒塗り、円筒形で蓋があり、手に提げて持てるように紐がついている。隣に描かれている枡桶(マサシントク)に比べるとかなり小ぶりである。『松浦武四郎紀行集』下の口絵に復刻されているので御覧いただきたい。また後者は『松浦武四郎選集』二に収められているが、「四升を入る也。是に二はゑとして一俵と云り。惣而勘定是を以て定む」との説明が付いている。前述のようにカモカモには1升6合入、1升2合入、3升5合入のものがあつたが、この4升入が大であろうか。その2杯分が「夷俵」(造米とも)1俵となれば計量にも都合がよかつたはずである。

このように、カモカモの形状がわかれば、あとは絵画・図像資料にひろくあたって探すことができる。たとえば木村巴江「熊送の図」、同「祭礼之図」、川端玉章「アイヌ大漁祈願ノ図」、平沢屏山「炊事の図」「神祈り図」(谷本一之『アイヌ絵を聴く』、図録『アイヌの四季と生活』)などに、人物の側に置かれさりげなく描かれている。塗りのないものや緑塗りのものもあつたようだ。

カモカモの名称について『日本国語大辞典』第二版は「米穀をはかるための、一斗を容量とする桶のかたちをした枡。斗桶」と説明している。出典の「俚言集覧」(1797頃)には「東国に此桶の名をかもかもといふ」と記されている。この斗桶とアイヌ社会のカモカモはどのようにつながっているのだろうか。

実は菅江真澄もカモカモの絵と文を残していた。それについて舟山直治氏が考察を加えている(「近世中期の北海道における桶の形態と利用」(『北海道開拓記念館調査報告』35、1996年) カモカモは取手や紐のついた桶のことで、酒や水を入れるのに使い、アイヌ語でニヤトス(小枡桶)といい、東北地方に類似の曲物のあることなどが指摘されている。女性との関わりも深そうだ。武四郎の計量具としてのカモカモの用途は真澄などには出てこない。さらなる調べを必要としている。

杭州に関わる二つのテーマ

大里 浩秋（事業担当推進者 / 神奈川大学大学院・教授）



初めて杭州に行ったのは1980年夏のことで、この年の春から広州の大学で日本語の教師をしていたので、その大学の夏休みを利用し日本語のできる若手教師のお供付きで出かけた。赴任の数ヶ月前に「陶成章研究」と題する修士論文を書き上げたばかりで、陶成章がリーダーだった光復会関連の資料をいくつか読んでいたことから、資料で知った同会の活動を今度は現地では何か確認できればと思ったのである。ところで、いくつかの場所を回ってみたものの、当事者たちの活動現場を探る作業よりも彼らの墓の所在を確かめるほうが具体的で興味深いものがあった。彼らが杭州で立ち寄った場所は記録上はいくつもわかっているが、その場所をさらに特定できるほどに記述が詳しくないので、なんとなくそこに近づいたという感じしか湧かなかった。この点は、光復会の主要メンバー陶成章、徐錫麟、秋瑾などの故郷である紹興には、それぞれの生家（あるいは実家）が残っているばかりか、会員を訓練し蜂起を準備した大通学校も残り、さらに秋瑾が処刑されたあたりも特定できるとあって、想像力をかき立てるにふさわしい場所がいくつもあるのである。しかし、彼らが志半ばでいずれも非業の死を遂げる（徐と秋は1907年の蜂起失敗で逮捕処刑され、陶は辛亥革命後まもなく内部抗争で暗殺された）や、埋葬されたのは杭州の西湖畔であった。そこで、私の西湖に対する第一印象は、きれいだ、より、周りに光復会員の墓がいくつもあるところ、というものだったが、墓所の類なら特定できるのではと踏んで出かけてみたものの、本人の生前の希望があって西泠橋の近くに埋めたはずの秋瑾の墓は跡形なく、その近くに造っ

たという陶成章の墓も、少し離れて中山公園内に建てたという徐錫麟の墓も、それと感ぜられる土台石のかけらも見つけることができなかった。1960年代半ばに起こった文化大革命の混乱の中、各地で古い建造物を破壊する動きがあったとは聞いていたし、この時杭州の後に行った紹興で陶成章のお孫さんに会って陶の墓が壊されようとして間一髪遺骨は掘り起こしてどこそこの山中に埋葬したと聞いて、彼らの墓がなくなっていることに格別驚くことはなかったけれども、本人には預かり知らぬことながら、死後60年近く経ってなお子孫が心を痛める場面があるような歴史の展開は一体何なんだと考えさせられた。

その後80年代後半だったか、秋瑾の墓が元の場所の近くに石膏の立像と共に新たに造られ、陶成章や徐錫麟の墓も仲間の光復会員の墓と一緒にまとめて龍井茶の畑が点在する丘の中腹に造られたと聞き、もちろん見に行ったが、それらから受ける印象は薄くて、湖畔の叢を石のかけらの一つでもないものかと張り詰めた思いで行きつ



写真の上に付した文字は「中国女性で国のために血を流した最初の人」の意、下の文字中「鑑湖」は紹興にある湖の名。『香艷雑誌』第三期所収。

戻りつした時の光景には比べるべくもなかった。もう一つの後日談、2年前に同僚の孫安石さんがある雑誌に載っていたのでといって一枚のコピーを渡してくれた（前ページの写真）ここに写っているのは西湖第一の秋瑾の墓で、それまで私は見たことがなかった。多数の弁髪、帽子姿にはさまれて処刑の翌1908年にできたばかりの墓をぼんやりながら確認することができ、こんもりした塚の上に花輪が置かれているのも見て取れる。そして、写っていない手前には西湖が迫っており、背後の建物は、私の推測に間違いがなければ、秋瑾の時にも陶成章の時にも追悼会を開いた鳳林寺の一部である（ここにはのち杭州飯店が建ち、今はシャングリラホテルになっている）と、秋瑾の墓は、できた年の暮れには清朝側の手で壊され、そのため夫の故郷湖南に移葬し、中華民国元年にまた遺骨が杭州に運ばれ、第二代の墓が第一代と同じ場所に再建された（何年かは未確認）が、それがまた文革で壊されたというわけである。なお、翌81年にも杭州、紹興に出かけて自己満足的調査を続けたが、その後数年で彼らの伝記や年譜を相次いで書けたのは、あるいは、現地調査で増幅した彼らに対する思い入れがエネルギー源になったためかもしれないと感じている。

次に、杭州日本租界に関する話である。90年代初めに華僑関係の資料探して長崎県立図書館を訪ねた際、日中戦争時の1941～44年、杭州に置かれた特務機関に勤務する日本人が編集発行した『浙江文化研究』という月刊誌があるのを見つけた。読んでみると、「凡ゆる面よりする浙江省研究」（「創刊の辞」）を旨として、浙江省とその省都杭州の歴史や文化、さらに現実の社会や経済の実態調査に関する文章がごちゃに載っていて、占領した地域（といて、浙江全域を実効支配できていたわけではない）における文化面からの支配の実態がうかがえると共に、日本人には杭州大好き人間が多いことを実感させる内容で面白かった（拙稿『『浙江文化研究』初探』、『中国研究月報』1994、6参照）そしてこの雑誌中に、日本領事館が1896年に設置されて以来の在留日本人の様々なエピソードを紹介している一文（河合宣「杭州居留民誌稿抄」）があり、そこに日本人商人と中国人住民との騒擾事件が取り上げられていたのに興味を覚えた。詳しく知りたと思って外交史料館に行くと、うまい具合に「明治43年清国杭州暴動並城内居住日本人撤退一件」と題する文書が見つかった。これに拠ると、事件は1910（明治43）年3月24日夜に杭州城内の大井巷（巷は横丁の意）で起った。そこで日本人が経営する煎餅屋兼遊技場に中国人客が来

て、空気銃射撃を的的に命中した、しないで言い争いになり（1発命中したら15枚の煎餅がもらえる）拳句にもう帰れと追い出そうとする店の主人とちょっとやらせろという客、さらには続々と集まってくる野次馬との間で小競り合いとなり、主人が身の危険を避けて警察に保護されるや、大勢の野次馬が日本人はけしからんといって店を壊し始め、さらに近くに出している10軒程の他の日本人の店にも押しかけて殴ったり商品を壊したりして騒然とした状況になった末に、軍隊が出動してようやく鎮まった、というものである。ここまで読むと、たわいのない喧嘩が発端で日本人憎しの排外暴動を起こした中国人の方が悪いということになってしまうが、その後の展開を見るとそうとばかりはいえないことになる。事後処理の外交交渉において、日本の外務省は店の破壊と暴行負傷に対する謝罪と弁償を要求したのに対し、杭州当局は、この事件はそもそも城内での営業を禁止している外国人の店がその規則を無視して開いていることから起こったことであるから、全ての責任は日本側にあるとして真っ向から対立し、それに呼応するかのごとく住民中のインテリ層による日本人の城内営業禁止を求める集会が開かれているのである。そして、こういう動きから、上記の野次馬による排外的色彩濃厚な日本人の店に対する襲撃も、その背景には確かにその10数年前に日本が日清戦争の勝利の勢いで杭州を含む四つの租界を開かせたことへの怒りがあり、さらには、日本が租界のみでの営業を約束したにもかかわらず、野原のまま開発が一向に進まない租界の現状から城内での営業を止むなしとして先の約束を反故にしつつあったことへの反発があったのだと気づかされる。結局日中間の交渉は落ち着く所で収まった感があり、中国側は弁償金を払い、日本人商人は城内から立ち退くことになったが、日本政府は立ち退きは商人の身の危険を避ける為の一時的撤退であって、中国側主張を認めたものではないと強弁した為、その後に対立の目を残すことになった。こうして、以上に述べたような関心からまた何度か杭州を訪ねることになり、昔ながらのたたずまいを残す大井巷や荒れ野原でありながらまもなく高層住宅が建てられようとしている旧日本租界に足を運んだが、紙面が尽きてしまった。この辺の事情については別の機会にまとめてお目につけたいと思う。なお、関連したものとして拙稿「杭州大井巷事件の顛末」（神奈川大学人文学研究所『日中文化論集』）と「杭州日本租界について」（神奈川大学『人文研究』No.149）を参照していただければ幸いである。

非文字資料としての 加賀藩検地絵図を読み解く



田上 繁 (事業推進担当者 / 神奈川大学大学院・教授)

1 従来の文献史料を主体とした検地研究

近世社会が石高制社会であったことは、大方が認めるところである。ただ、その石高の性格については、生産高説、あるいは年貢高説など論者によって見解が大きく分かれる。しかし、いずれの論者においても石高の本質を追究する場合、研究素材として「検地帳」や「検地条目」などの土地関係史料を利用してきたことは、多くの説明を要しないであろう。その結果、従来の検地研究では、田畑・屋敷地の一筆ごとの丈量によって、それぞれの等級、生産高、名請人などが把握され、それを基盤に石高制が確立したとする見解が通説となっている。

ところが、加賀藩においては、天正10年(1852)から同12年までの指出検地に近い初期検地帳が数点残っているものの、それ以後の検地帳は皆無である。その代わり、天正13年以降、「検地打渡状」が加賀藩全域で歴々に伝存する。これは、田畑・屋敷地一筆ごとの検地帳とは異なり、検地奉行人の連署と宛名の村名のほかに、単に全体の面積と「分米」高(「分米」は慶長期のものから記載)や、「江川溝堀道引捨打渡所、如件」と記された奥書があるだけの一紙ものに過ぎない。面積に関しては「田畠屋敷共二 畠八上中下折合テ」との但書がなされている。しかし、この「検地打渡状」の記載内容からは、通説のような検地の実態を読み取ることはできない。

そこで、加賀藩の「検地条目」の内容をうかがうと、初発の元和2年(1616)の「条目」では、「今度検地、田畠一反に付而三百歩宛、無相違様に可打渡候、江川道以下、如此已前可打除事」、「畠方折之事、上中下により可相究事」などといった条項が主なものとなっている。「江川道以下」の抜物規定や「畠折」規定が盛り込まれている点は注目される。また、寛文12年(1672)の「能登半郡検地心得」では、「田地縄張之儀、大囲は二筋、小囲・縁端一筋之事」とか、「一ヶ村宛、其村領地の様子致絵図、相違無之旨十村奥書御取候而、……」や、「畠方折之儀、御扶持人相談候而可有御極事」などといった条項がある。さらに、そのあと桑・麻畠・たばこ畠・百姓居屋敷並廻

堀などおよそ20種類の作物や土地が「田成物」であり、石塚・三味・宮屋敷・道・用水などが「大縄の内抜物」であると規定した項目が追記される。ただ、これらの「検地条目」と「検地打渡状」をいくら検討しても、やはり加賀藩の検地方法をうかがい知ることは困難である。

2 加賀藩検地絵図の読み方

そこで、加賀藩の検地絵図を読み解きながら、検地の実態に迫ることにしよう。加賀藩検地では、図1のように最初に百姓身分である十村や御扶持が中心となって村の境界を決めるため、磁石や間縄などを用いて測量を行う。その場合、測量方法には「廻り分間法」と「平板測量法」があったが、近世初期においては前者が採用された模様で、その測量結果を受けて村全体の縮尺図が作られる。それが、図2の「仮絵図」とか「下絵図」と呼ばれるものである。その「仮絵図」の中に屋敷・川・道・宮などを描き、さらに、できるだけ大きな四角形を書き入れていく。そして、端の方には三角形などを記入し、そうして完成したのが図3の「領絵図」である。四角形や三角形には順に「壱番角」「二番」などと番号が付される。これは雑形であり、実際の検地の結果を示した「領絵図」ではない。

本物の「領絵図」を掲げたのが、図4の文化9年(1812)の「能美郡西原村領絵図」である。この「領絵図」には「壱番」から「十五」までの番号が付され、「壱番」「弍番」「五」の3つが「角」であり、あとはいずれも「縁端」である。この「領絵図」をもとにして、実際に現地へ赴いて計測が行われる。この西原村の検地には別に同年の「能美郡西原村内検地打立并抜物帳」があり、その面積の算出方法が分かる。まず、各番付の長さや幅が計測され、それらに乗じて番付ごとの歩数が求められる。そして、畠のある番付では、そのまとまった畠ごとに「畠折」が施される。その「畠折」とは、例えば「三つ折」の場合、そのまとまった畠の歩数が仮に300歩であるとする、その3分の2が計算上で切り捨てられ、残った100歩がその

番付の歩数となる。これは、田と畠の価値の差異を調整するためのものである。

さらに、各番付の歩数からその「畠折」分と、江・川・道・宮などの歩数が「抜物」として差し引かれ、最終的な歩数が確定する。もっとも、畠の中でも価値の高い桑・麻畠などや百姓居屋敷並廻堀は「田成物」として田と同等とみなされ、歩数が差し引かれることはない。こうして、各番付から「抜物」歩数が控除されて、最終的な名目上の歩数が算定されることになる。これに加賀藩の一律1反当たり1石5斗の斗代を乗じると村高が自動的に求められる。これが、加賀藩検地の全貌である。だからこそ、一紙ものの「検地打渡状」で事足りる検地であったのである。こうして、「惣高廻り検地」と呼ばれる加賀藩検地が、一筆ごとの面積や等級、石高、名請人などを掌握しようとした検地ではなかったことが立証される。

3 文字資料と非文字資料の突き合わせ

西原村の検地では、歩数を求めるとき、3つの「角」では「南縄」と「北縄」を計って求めた平均値と、「東縄」と「西縄」を計って求めた平均値とを乗じてそれぞれ歩数を算出している。他方、「縁端」の番付では単に南北と東西の長さや幅を乗じただけで歩数を求めている。これは、広い「角」の場合、2カ所の計測だけでは誤差が生じやすいためであり、前出の寛文12年の「検地心得」にある「大囲は二筋、小囲・縁端一筋」とは、まさにそのことを規定しているのである。「畠折」や「田成物」「抜物」に関

しても、元和2年及び寛文12年の「検地条目」が示す通りである。

このように、「検地条目」と検地絵図を照合することにより、文献史料だけでは解明できなかった検地の実態が浮き彫りとなる。十村クラスの多くの家には、この検地方法を記した「検地仕様書」の類が残っており、農書『耕稼春秋』を著した土屋又三郎も形の異なる六か村の「領絵図」をサンプルとして描いている。また、領主側でも、改作奉行河合祐之は「河合録」の中で、「検地仕様大綱」は「領惣体之廻り分間を致し、絵図二拵」え、「其上二て縄を入る、可成丈大角二取、縁端千歩以下八十文字縄を入ると述べたあと、「惣抜物共打込縄を張り、その「打立帳之内より抜物を引」き、残りを「極高」とすると記述している。そして、「畠有」れば「別二打抜、折を極、折捨歩引去」り、これら「惣打立歩之内抜物歩并畠折歩引去」って、「残高」を「極高」と但書しているのである。その記述内容が、検地絵図で裏付けられることはいうまでもない。

以上、加賀藩の検地絵図を取り上げ、文献史料では解けなかった検地の実態を絵図と突き合わせることで、それが可能となった事実を提示してみた。全国にはこのような検地絵図がまだかなり残存しているものと考えられ、今後、文字資料の限界性を克服する非文字資料として収集、分類し、さらに、研究に供するための有効な文字資料と非文字資料とをセットにした発信方法を検討する必要がある。



図1 測量人絵図(享和2年「検地領絵図仕立様」金沢市立図書館蔵郷土資料)

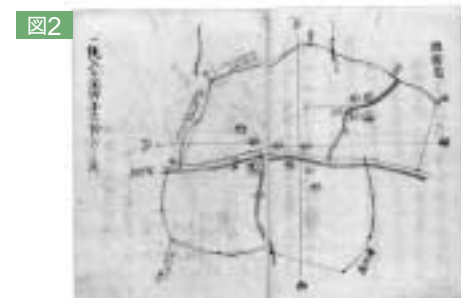


図2 仮絵図(文化12年「検地領絵図仕立」金沢市立図書館蔵郷土資料)

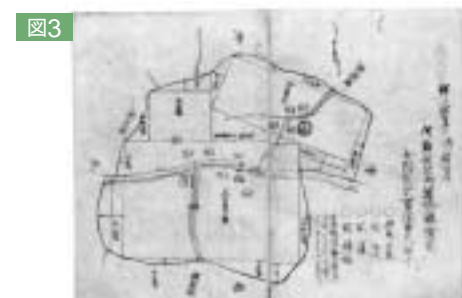


図3 領絵図(文化12年「検地領絵図仕立」金沢市立図書館蔵郷土資料)

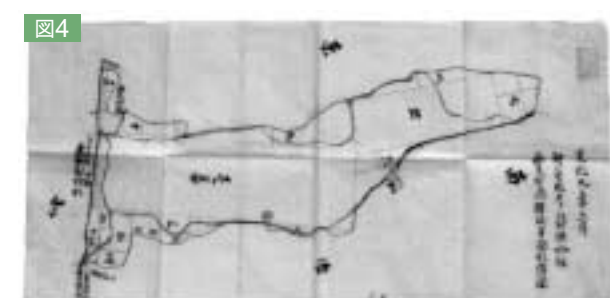


図4 西原村領絵図(文化9年「西原村内検地分間領絵図」金沢市立図書館蔵加越能文庫)

道教の符呪 道教儀礼史における 非文字資料研究の可能性をめぐって



丸山 宏 (COE共同研究員 / 筑波大学大学院・教授)

東アジアの宗教文化の中で、道教はきわめて重要であるにもかかわらず、なかなか実態を把握しにくい宗教文化である。道教の深遠な教理や複雑な儀礼、さらには社会における役割について、平明に説いた概説書や詳細な資料に依拠して理解しやすく分析した専門書が、仏教や儒教などに比べて非常に少ないことは否定できないのが現状である。

道教は漢字文化を創出した中国において発展した宗教であり、教理の根本を表現した『老子道德経』自体が文字によって書かれ、近年、従来知られていたよりも古いテキストが出土して、解析が進められているところである。道教とは原初から文字化された媒体で流通した思想体系であったといえるだろう。しかし本稿では、非文字資料研究という角度から、道教の儀礼の中に見られる文字ではない儀礼装置としての符呪、特に符について紹介と考察を加え、研究の可能性を探ってみたい。

ここで言う符とは、本来はある記号を二つに割って、あとで付き合わせて確かめるための割り符に由来する。より原理的に説明すると、何かを表すしるしが示されて、しかもそのしるしには対応するところの何らかの求められた現実を生起させ得る力が付与された状態になっていることが重要である。古代中国で兵を動かすときに銅虎符を用いたが、この符を持たなければ皇帝の許可を得ていないことになり軍事行動を起こせないけれども、符を持っていれば皇帝の代理で兵を動かせた。宗教では符は皇帝でなく高位の神や祖師の権威で、鬼神を動かす命令の力を持つことになり、鬼神に対する符命や符敕となる。しるしはそれ自体に神秘的な力があるものとされ、宇宙の原初のうずまく気のエネルギーを示す力強い曲線、いわば文字が文字として立ち現れる前の原初の文字のような形が、朱色の筆で複雑に描かれる例が多い。

なぜ道教の符を問題にするかという点については、いろいろな理由付けができるであろう。歴史的に見て、符を宗教的な用途で利用し、あるいは現在も利用しているのは、道教のみではなく、シャマニズムを含む民間信仰

や仏教も含まれ、漢民族居住地区はもとより、周辺地域の諸民族の巫師、法師、民間の僧侶等もさかんに利用する。そうした広がりをも認めることはできるが、道教が符を用いることは、その歴史の長さ、資料の多さ、現在の儀礼実践における使用頻度と重要性、符に関する宗教理論の精緻さからして、やはり独特の研究価値があると考えたい。

私が調査している台湾の台南市とその周辺地域に伝わる道教儀礼の伝統は、非常に豊かな内容を誇り、地域の安泰を祈る醮の儀礼と死者を地獄から超度する功德の儀礼をよく行っている。それぞれの儀礼で、道の神に仕える高級官僚としての道士は、多くの文書を作成し、神や死者の霊に発出してゆくが、その中で符も多用される。しかも符は儀礼にとっては中核的な意味を担う。例えば、醮の冒頭で使役するすべての神々を呼び集める時に「玉清総召万霊符命」を用いる。また醮壇を建壇するのに東西南北中央の五方の真文を安置し、散壇するのに真文を回収する。これは主要な儀礼をその内部で行う儀礼空間の五方に、五行の聖なる気を配置することおよびそれを解除することを意味し、『靈宝度人經』という5世紀に成立した道教経典で述べられた宇宙生成の原初に五篇の符が発生して世界を安定させたという壮大な教理内容に即している。

登台拜表という科目では、道士は満身に護身符を貼って天に飛翔し神に謁見する演技を行う。これは剛風世界という高い空の危険な所を通るために必要なこととされる。さらに醮の儀礼では道士が水に符を書き入れて符水を作り、また紙に平安符を書き、村人が自宅に持ち帰る。符をもらう時は、全員の分が作成されてあるのに、人々の表情はいかにも真剣で殺気立ってさえる。醮の後、村中の家々に平安符が貼られる。

功德の儀礼でもやはり符の力で死者を救済する。功德の儀礼の最初に、道士が神々に発出する文書として「三清七宝宮呈請」があり、これに「すべての符敕は、臣の篆を書いて奉行するを容さんことを」と明言し、道士が

神の代理で死者の罪を許す命令としての符を含む、儀礼に必要なあらゆる符について、篆文を書くことを承認してほしいと述べているのである。実際に功德儀礼では醮よりも多くの符が用いられる。例えば十巻からなる『冥王宝懺』という経典を一巻読むたびに一枚ずつ発出する十廻度人真符は、段階的に死者の身体を治療し再生させることができる(写真1)写真の符は救苦天尊の命令で死者を枯れた骨から起ち上がらせるという。符形には救や太上の字の変形が見える。

また東極九龍符命と称する符は、地獄の苦しみを停止させ、死者を朱陵という天界に行かせる内容である(写真2)。写真は1992年12月に高雄県の杜永昌道士が主宰した功德で使われた符の複製を最近撮影し直したものである。この符は、青玄左府の寧真人の代理で杜道士が十方九野陰曹万神に対して出した命令であり、救済対象は黄門何氏金妹さんである。寧真人とは、号から判断して12世紀に実在し靈宝大法の革新に貢献した寧全真を指す。寧には『上清靈宝大法』、『靈宝領教濟度金書』があり、現存する。その『上清靈宝大法』巻45の小九龍符の符形は現行のものと同じであり、符に付随する呪文も同じであり、台湾の儀礼の系譜の一端を一枚の符が如実に

物語るといえるであろう。朱筆の符形に関して解釈を加えれば、中央やや上に龍の字があり、その上下にも簡略化された龍の字の変形が幾つか配され九匹の龍を示す。九や龍は陽の力を表し、陰である地獄に陽の龍を突入させて、陰の世界を変容させる意味を有すると解釈できる。下の方には陰曹の曹の字の一部らしい形も見える。

私の知る限りでは、斯界の代表的な先行研究である大淵忍爾『中国人の宗教儀礼』(福武書店 1983年)では儀礼文献の録文が充実しているが、符形については省略され、関連文献との綿密な比較検討もいまだ行われていない。民間で用いられる個別の民俗的な護符の研究が成果を上げているが、複雑な道教儀礼の体系や歴史をふまえ、図像としての符に十分着目した研究が一層必要であると思う。道教儀礼が人々を救済できる根拠の一つには符という非文字、文字以前の文字の力が想定されていることは明らかであるからである。

参考文献

大形徹、坂出祥伸、頼富本宏(編)
『道教的密教的辟邪呪物の調査・研究』
(ピング・ネット・プレス 2005年)

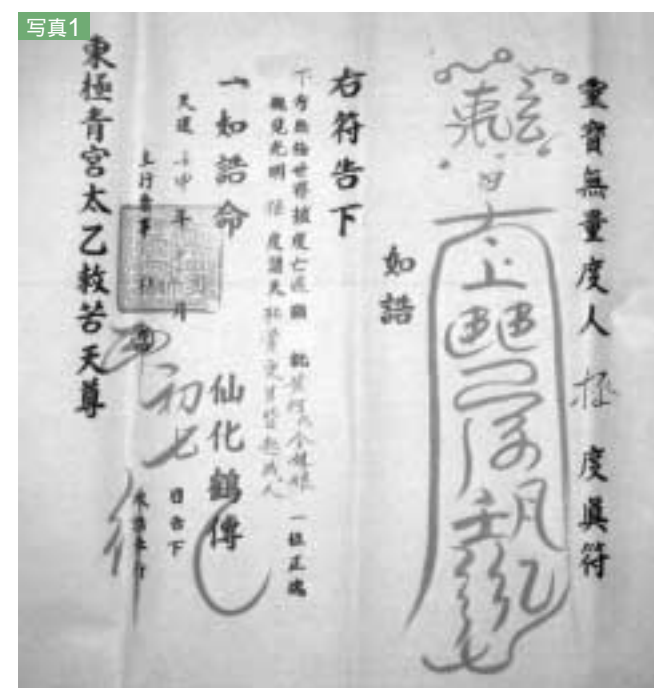


写真1 十廻度人真符の一つ、靈宝無量度人拯度真符

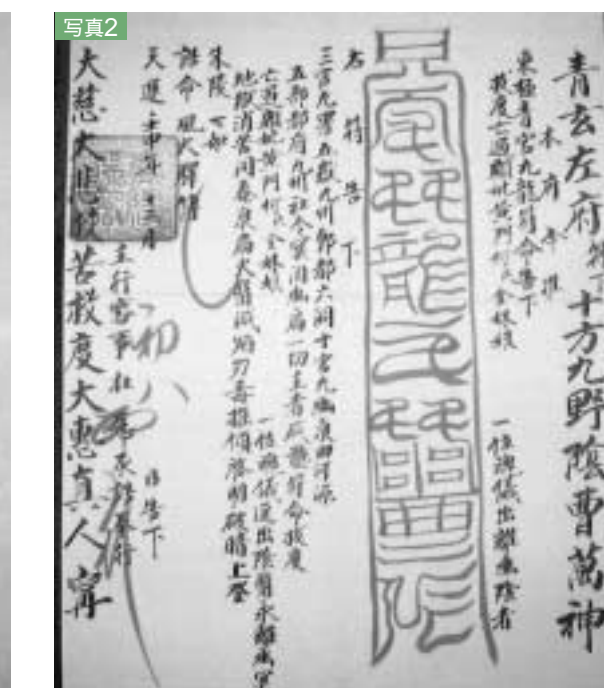


写真2 東極九龍符命



納西族東巴教「求寿」儀式調査

夏 宇継 (COE共同研究員 / 神奈川大学大学院・非常勤講師)

2003年末から新年にかけて、麗江から迪慶へ雲南シャングリラの旅をした。この地に息づく納西族東巴文化に大いに魅了された私に、麗江市東巴文化研究院の張福龍氏より、半世紀以上も途絶えている東巴教「求寿」(延寿ともいう)儀式を協力して復活させ、後世に伝えようとの提案があった。それからの十五ヶ月、我々は絶えず連絡を取り合い、白庚勝氏ら専門家や老東巴たちの意見を聞き、資料を集め、現地の予備調査をした上で、今回の儀式実施を決意したのである。

東巴教「求寿」儀式

東巴教は、納西族の原始宗教から創唱宗教への過渡的な性格をもつ宗教である。東巴文化は主に、その3、40種類にもよる宗教儀式によって表現され、伝承される。

「求寿」儀式は、大中小20余りの儀式が交錯し有機的に組合された総合的な儀式で、東巴教儀式のなかで最大規模を誇る。また、それ自体が東巴のためのものであり、華神を招き、儀式の対象となる東巴の属する一族の生命力を盛んにし、無限の活力をもてるよう加護を求める。また「加威靈」という特徴的な内容を含み、盛大な「加威靈」儀式を通して、参加した普通の東巴たちに「神名」を与えるとともに神の威力、靈力を大いに付与するものである。

この儀式の膨大さ複雑さは、三つの「多」と言われる。まず東巴だけでも2、30人は必要という参加者の多さ。つぎに時間的な多(長)さ、そしてかかる費用の多さである。神霊や鬼などに捧げるいけにえの家畜、供物だけでも舌を巻くほどだが、それに参加者の連日の飲食費を加えると、その巨額の費用たるや一般人ではとても負担できるものではない。こうした理由から、新中国成立以前もめったに行なわれるものではなかったし、その後では、長期にわたる政治的な大変動により、ますます実施が困難になっていたという事情がある。

老東巴・和秀氏
年齢80に近い老東巴・和秀氏は、かつて麗江地区内で「求

寿」儀式に参加したことのある唯一健在の東巴である。その60年以上前の儀式は彼の一族のために行われた。もしこの病気がちな老東巴が亡くなってしまったなら、この儀式を後世に伝える歴史の証人が失われ、その本来の姿を記録し、復活させるすべがなくなってしまう。また、不完全な資料に基づいてむりやり復活させたなら、誰にも認められない筋の通らぬものとなり、その意義も大いに割り引かねばならない。幸いにも、今回の「求寿」儀式復活の知らせを聞いて以来、何度か生死をさまようほどの大病を経た老東巴であったが、「この儀式をやり終えないで、どうして死ねようか」と元気を取り戻してくれたのである。

儀式の対象となる東巴の決定

今回の儀式は、雲南省麗江市玉龍納西族自治県塔城郷依隴行政村署明片五組に住む東巴、楊玉華(28歳、既婚)を対象として行なわれた。

楊玉華は中学卒業ののち東巴となった青年で、現在、兄とともに東巴研究院で東巴としてのさらなる技術を学んでいる。彼の家は代々東巴で、すでに8代を数え、「加威靈」儀式に参加した者もいる。祖父(故人)は著名な東巴で、大きな威力をもつ神像(画像)を所持していたが、父の代になると時代の関係もあり、東巴を学ぶことができなかつたという。儀式は世襲の東巴宅でという我々の考えと、東巴である以上、大きな威力、靈力を付与されたい、東巴の家系を再興したいという楊玉華の願いが一致して、今回の儀式の執行となった。

また、署明片は麗江より約160キロ、海拔2,700メートル位のところにある。五組は23戸、120人ほど、住民はいずれも楊姓の納西族で、東巴教を信奉している。小麦やジャガイモを植え、家畜を飼う彼らの年収は300元ほどで貧困地区に属するが、衣食に困ることはない。ここでは四方を山に囲まれ、青い空に緑の山々、清らかな水の流れる美しい昔のままの自然が保たれ、人々は、夜であっても戸締りをする必要のない、純朴な風俗をもってい

る。こうした現代の浄土、納西文化の生きた化石ともいふべき環境が、今回の儀式にさらに絶妙な結果をもたらしたのである。

儀式の日程とあらまし

老東巴和秀氏、著名な研究者でもある和力民氏を含む28名の東巴(地元16名、麗江より12名)と10余名の助手が招かれ、参加したが、彼らは経典を100冊以上も暗誦している、踊りの師匠であるなど、みなそれぞれの技を持つ選ばれた東巴たちであった。

時間の関係で、十分な準備を前提に、すべての儀式を6日間で行ったのだが、和秀、和力民両氏が協議を重ねて決定したこの儀式の次第は、具体的な状況に即応し、かつ重要な部分についてはいささかの漏れや疎かなところもないものであった。

1日目(4月2日)

- 1.神座、祭場の設置、焼天香。
- 2.麗江の東巴を迎える儀式。

2日目(4月3日)

- 1.口舌是非鬼を退却させ、凶死鬼を祭る儀式。
- 2.穢鬼祭祀と除穢の大規模儀式。

3日目(4月4日)

- 1.署神(自然神)の大規模祭祀儀式。
- 2.楊家祖先神の招来と祭祀儀式。
- 3.戦神の祭祀儀式。
- 4.星神の祭祀儀式。

4日目(4月5日)

- 1.「祭風」儀式。
- 2.雷神、稲妻神の祭祀儀式。

5日目(4月6日)

- 1.「加威靈」儀式。
- 2.大型「焼天香」儀式。
- 3.華神など大神を招来、福を賜る、「求寿」儀式。
- 4.家畜神の祭祀儀式。

6日目(4月7日)

- 1.山神の祭祀儀式。
- 2.三朶神(地域神)の祭祀儀式。
- 3.祭天儀式。
- 4.「送龍神」儀式。
- 5.家神の祭祀儀式。

以上20ほどの儀式のほか、多くの小さな儀式があちこちで行われた。大きな儀式は6、7時間を要し、基本的にこの順序で行われたのだが、時には二手に分かれ、また

中庭、村落各地で同時に行われたこともあった。特に4日目の「祭風」儀式は付近の風光明媚な山頂で、6日目の祭天儀式は楊玉華の一族(族長楊天順)の祭天場で行われた。

楊玉華宅は南面の傾斜地に建てられ、中庭を囲んで東南西三方に建物を配する。北側には山の斜面が広がり、ちょうど天然の見物席となっていた。西側の部屋前の主となる神壇には刹利威登、恒迪窩盤、丁巴什羅神などの大神、戦神などが祭られ、中庭の中央には上に鶴の飾りを施した樹木が高々と立てられ、五色の糸でつくられた幾何学的図案や紙の花などで美しく飾られていた。

儀式の期間中、東巴たちは延べ200冊以上の経典(世界で唯一残されている生きた象形文字、東巴文字で書かれている)を読み、「白獅舞」「射箭舞」など20近い東巴舞を踊った。祭場には、終日、線香や松の枝をいぶす煙が立ち込め、神前には小麦や粘土で作ったさまざまな人形、米などの穀物、酒、茶、酥油、塩、砂糖、香炉、ランプ、ローソク、聖水の碗などがところ狭しと置かれた。もともと1週間以上の内容であったため、連日、夜になっても昼のように灯りがともされ、継続的に儀式が行われた。最も遅い時刻では、4月4日の戦神祭祀が深夜の3時半まで続いた。こうして我々の調査活動も毎日十数時間を越えていた。

神霊や鬼に捧げられたいけにえの家畜は、黄牛1頭(4歳以下いずれもオス)、山羊3匹、白綿羊1匹、黒毛豚2頭(3歳)鶏20羽にのぼった。殺す前、すべては神霊や鬼に捧げるためであるから、規則どおりに行き、自分たち東巴には罪はないという意味の経文が読まれ、専らこの方面をつかさどる東巴が頸部にナイフを刺した。一般に、家畜はまず生きたまま捧げられる。つぎに鮮血、そして切り分けた主要な部位肉、最後に煮てスープとしたものと、あわせて4回捧げられた。

また百枚以上の巧みに描かれた木牌、粘土や小麦粉で作られた数十もの人形、真に迫った表情の紙製の羊、樹枝で編まれた馬、踊りに使う花束、弓矢などが作られ、準備途中の品々もあり、その数は「焼天香」に使うために切り出されてきて積み上げられた松の枝だけでも山のようであった。

神の意向はなにものより崇高である

実際、今回の儀式には村中をあげて参加していた。特に「加威靈」儀式の時には、遠近より200人以上も見物に訪れ、人々は歓声を上げ、何度も興奮の渦に包まれた。

3ヶ月の乳飲み子から、最高齢は73歳の老婆まで、みな一番よい服を着て、お祭りの日のようであった。小学生は、先生に引率されて見物にやってきた。

儀式を執行している側には「人に見せるため」という意識は少しもなかった。東巴たちはただ敬虔な信仰心から、抑揚を付け、間をおき、調子を変えては経文を読み、あたかも酔いしれたように、熱に浮かされたように踊った。見ているものたちはこれに歓声をあげ、我を忘れたように興奮の中に身をおいた。こうした姿は感動するに十分であった。

また神霊への人々の畏敬の念を示すものとして、次のようなことがあげられる。華神祭祀に用いる2本の柏の木は、切り倒したのち、牛に引かせたりトラクターで運んだりせず、5キロの道のりを人々が一步一步かついで来た。私は美しく描かれた木牌を記念に持ち帰りたいと願ったが、使用した木牌は、3枚を特定の人に送り、残りはすべて焼却するのが神の意であるとのこと、あきらめざるを

写真1



「加威靈」儀式の東巴舞。後方は見物に来た村人、子どもたち。

写真2



「加威靈」儀式において、「神米」が撒かれるのをじっと待つ東巴たち。

得なかった。署神は精進料理しか食べなかったとの記載にもとづき、署神祭祀の日は、全村で1人の例外もなく、肉食をしなかった。星神の祭祀は、ある最も明るい星が一定の位置に来たときに始めることになっており、みな夜中の12時半までひたすらその時を待った。戦神の祭祀時には女性は避けるよう求められ、楊玉華の母親と妻でさえ台所に身を隠した。私とて、この儀式を組織したにもかかわらず、何の特権も持ち合わせなかった。この特定の場所、特定の時間において、神霊の意向は何よりも崇高なものであり、こうしてその場の空気はより神聖になっていくのである。

我々はこの上ない崇敬の念を抱いて神の意志に従った。神もこれに感動したのか、数日前まで雨の降り続いていた署明片は、儀式の前日から連日晴れ渡った。4日の儀式のとき、東巴経の言い方として、儀式が靈驗あらたかか否かは雨が降るかどうかによると言っていたところ、雲ひとつない青空から突然一陣の小雨が降ったのである。

今回、私、夏を代表とする神奈川大学COE、張福龍、和力民両氏を代表とする麗江市東巴文化研究院、撮影技師の任春生氏を代表とする中国社会科学院民族文学研究所の三者が密に協力し合ったことにより、本来の姿の「求寿」儀式に対する多角的調査が実施され、大きな成功を収めることができた。調査期間中は予想以上にきつく忙しかったが、充実した意義深い日々であり、生涯忘れられぬものとなった。今、目を閉じると、耳が聞こえなくなるほどの銅鑼の音が耳元に響き、神名を賜り喜ぶ東巴たちの幸せな笑顔が目に見え、そして署明片の満天の星空が思い出される。北京と麗江の専門家たちもみな、今回の儀式は納西族のこの半世紀近くにおいて最も意義のあるもので、東巴たち、とりわけ若い東巴たちにめったにない実践的鍛錬の機会を与えたと同時に、東巴文化を当地および麗江地区全体において、さらに広く深く普及させ、伝承させたと評価している。人類学、民族学、民俗学、社会学の角度から見ても、そこに含まれる「黄金」の量は非常に多い。我々は資料の整理、研究などを引き続き行い、非文字資料の体系化方面から人類の文化研究に更なる貢献をしたいと願っている。

- 1：仏教、道教、キリスト教、イスラム教など人（教主）の創始した宗教をいう。
- 2：言葉や行為の行き違いから発生する鬼。
- 3：自然の風に対する祭祀，及び正常な死亡ではない者の魂は風鬼に変わり、崇るので、これを祭祀する儀式。

コラム

Column

対抗と交流

江 静（浙江工商大学日本文化研究所専任講師）

1972年の国交正常化後、中日関係は様々な問題を抱えながらも、発展してきたといえる。その一方で、両国民のお互いの敵対心がますます強まっているのも事実である。特に今年4月に入ると、教科書批判をはじめ、日本製品不買運動を標榜する反日デモなど、中国では、日本に対する反感が強くなっている。インターネットで日本側の反応を調べると、中国製品不買運動の呼びかけや、留学生を抑圧する悪意の書き込みなど、一夜にして平和な日本が右翼的な雰囲気呑みこまれたかのように見えた。この状況を見ると、日本文化の一研究者として、憂いを感じる。

歴史を顧みれば、中日両国間には摩擦と衝突が度々あったにもかかわらず、両国民の友好的な往来と文化交流が始終続いていた。例えば「蒙古襲来」があった元朝の時代でも、僧侶と商人が頻りに両国間を往来しており、大量の銅銭・陶磁器・書籍・香料・書画作品が日本へ続々と流入し、それと同時に、日本から木材・硫黄・工芸品などが中国に輸入されて、両国文化の発展に影響を与えた。それらの物品は当時の相互交流の歴史としていくつかの証拠を残している。京都国立博物館と東京国立博物館のサイトより、元代の作品を対象に統計をとると、京都国立博物館には計29点、東京国立博物館には計19点がある。

昨年の11月、神奈川大学COEプログラムの招きにより日本へ行く機会を与えていただいた。その機会を利用して、京都国立博物館と東京国立博物館で資料調査することができた。中国の展示品の前に立つと、私は不思議な感情が湧き上がり、胸が熱くなった。その感覚は中国で見学する時とは全く異なる感覚であった。日本での展示品は中国文化の魅力を展示するだけでなく、中国での展示よりも一層豊かな意味をもっていると感じた。即ち、それぞれの所蔵品は、数百年前に両国民が友好的に往来する歴史を如実に示しており、これらの展示品は中国文化の使者であれば、両国文化交流の結晶でもある。というのは、次の三つの理由からである。

まず、これらの所蔵品の製作者は中国人ではあるが、その伝播者、使用者、収蔵者の多くは日本人である。もし、両国民の協力がなければ、今日の私たちはどのようにこの魅力を感じ取ることができるだろうか。

次に、これらの所蔵品の多くが商品ではなくて、贈物として日本へ運ばれ、現在まで保存されているというこ

とである。これは、両国民の濃厚な友誼を示している。ここでは東京国立博物館に収蔵され、さらに国宝に指定された1点の書画作品を例として見てみよう。それは、元王朝に仕えた馮子振（1257～？年）が在元の日本僧の無隠元晦（？～1358年）のために、自作の七言絶句3首を添えて贈ったものである。この他にも無隠元晦に送った言葉が伝えられており、馮がいかにも無隠を重用していたかが伺われる。この国宝は、両国友好関係が深遠であったという最も有力な証明ではないだろうか。

最後に、中国人の作ったものであるが、日本に持ち込まれた後に、日本人の墨蹟も加えられた所蔵品の例を挙げよう。数百年以後の私たちから見れば、その作品は両国知識人の合作に映り、特に感慨深い作品である。例えば、東京国立博物館に葡萄垂架図という紙本墨画がある。その作者は江南の草虫図の名手と思われる。その水墨画には、中国人の作者の傍らに、能阿弥（1397～1471年）と狩野探幽（1602～1674年）の外題が付属している。

歴史の話題を離れ、現実に戻ろう。いくら問題があっても、中国に友好的な日本人は依然として多い。今回、日本に招聘していただいた時、COEプログラム関係者の方には大変お世話になった。

私が在籍していた浙江大学日本文化研究所も、両国の理解と交流を深めようと努力しつつある機関である。研究所は1989年に浙江省初の日本研究機関として設立された。1995年には、ユネスコによって、世界の主要な日本研究機関の一つとして認められた。1998年、浙江大学日本文化研究所となり、2004年9月から浙江工商大学に日本語文化学院が創設されるとともに、浙江工商大学に移転した。現在、人員体制は専任が15名で、内訳は教授2名、助教授1名、講師6名、助手3名、事務担当3名となっている。古代中日文化交流史、近代中日文化交流史、日本語文学を3本柱として研究している。

中日関係が緊張している時期であるため、私たちの研究所にも、間接的な影響があることを憂えている。しかし、こういう時期であるからこそ、中国での日本研究をする意義があると信じ、現在の中日の文化交流を進める橋渡しの役目を果たしていきたい。

1、2の解説は東京国立博物館のサイトによる。（江静氏は2004年11月29日～12月12日、訪問研究員として来日された。）



自由と想像 ロシアの博物館展示が教えるもの

ムカイダス 穆愷黛絲 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)

サンクトペテルブルクにはロシアが世界に誇るエルミタージュ美術館をはじめ、数多くの博物館や美術館があります。今回は、エルミタージュ美術館の「マンネルヘイム～ロシアの将校・フィンランドの元帥展」、ロシア中央海軍博物館「日口文化交流150周年記念・日本の春2005展」、ロシア国立サンクトペテルブルク歴史博物館「長崎原爆展」の3つの企画展示の現地参観を通してロシアの博物館事情を紹介します。

1 国立エルミタージュ美術館

1764年、時の女帝エカテリーナ2世がベルリンから225点の絵を購入し、その保管のためにペテルブルクの王宮・冬宮に付属の別館を造り、エルミタージュ(フランス語「隠棲所」の意)と名付けました。「エルミタージュの宝物を鑑賞しているのは、ねずみと私だけ」とエカテリーナ2世が友人宛てに書いた手紙にあるように、エルミタージュ美術館の始まりは彼女の個人コレクションでした。その後、所蔵品の増加とともに、エルミタージュは幾度も増築され、1764年から1775年にかけて小エルミタージュ、1771年から1787年にかけて大エルミタージュ、1783年にエルミタージュ劇場、1852年2月7日に新エルミタージュがそれぞれ完成しました。1917年の十月革命は、エルミタージュにも大転機をもたらしました。旧ソ連政府の「歴史的記念物の保護と国家への譲渡に関する法令」により、エルミタージュの経営は国家事業となり、旧貴族らの個人コレクションも収納され、その所蔵品の数は飛躍的に増えました。1981年にメンスキー宮殿、1982年、冬宮そのものも博物館の一部として開放されるようになったのです。現在のエルミタージュは、この6つの建物と所蔵品が300万点を超え、イギリスの大英博物館、フランスのルーブル美術館と並んで、世界三大博物館の一つとなりました。一つの所蔵品を見るのに1分かかるとしても、エルミタージュ所蔵品をすべて見るのに15年かかると言われています。

紹介する最初の展示は、2004年12月25日から2005年6月5日までエルミタージュで催された「マンネルヘイム

～ロシアの将校・フィンランドの元帥展」です。フィンランドがロシアの公国だった時代、ロシアの将校として日口戦争に参加し、後にフィンランドを独立に導き、フィンランドの初代大統領を勤め、今では「フィンランド建国の父」と呼ばれる彼は、1906年から1908年にかけてサンクトペテルブルクから探索旅行に出発し、中央アジアを通過、西安、北京、日本の長崎、舞鶴にまで来ました。今回は彼の生涯に関する写真や膨大な品々とともに、中央アジアで彼が撮影したウイグル人の写真30点、彼が持ち帰ったとされる、ウイグル人の民族衣装5点が小エルミタージュの一室に展示されていました。ウイグル人の生活、人間関係、食物、服装、笑顔など多岐にわたったそれらの写真は、同じウイグル人の私に当時の社会状況をはっきりと伝えてくれました。時代に翻弄されながら生きていく人間の瞬間の表情をカメラに収め、その表情に焼き付けられた時代を見せてくれる「写真」の持つ力に改めて気付かされ、また「非文字」資料という言葉の意味を自分なりに理解することができました。

2 ロシア中央海軍博物館

ロシア中央海軍博物館はネヴァ川河口に突き出した岬、かつての商品取引所の場所にあり、エルミタージュとは川をはさんだ向かい側に位置します。その歴史はピョートル大帝時代の1709年に船の模型と設計図を保存するために造られた「模型貯蔵室」から発展し、1805年にロシアの海に關係する資料を集めた海事博物館として設立され、1939年8月に初めてロシア中央海軍博物館としてオープンしたものです。そして、ここには1854年に日本に來航したプチャーチン提督とともにディアナ号で下田に來たアレクサンドル・モジャイスキー大尉の肖像画と、モジャイスキーの有名な作品である「下田の情景」、彼が当時の日本を描いた絵25点が丁寧に保管されていました。

紹介する二つ目の展示は日口友好協会、サンクトペテルブルク国際協力会、日口文化交流センター、ロシア中央海軍博物館、ロシア海軍国立文書館などの共催によるもので、2005年3月24日から5月31日までロシア中央海

軍博物館で行なわれた、「日口文化交流150周年記念・日本の春2005展」です。ロシア人画家のナターリア・マクシモアがプチャーチン使節団の訪れた場所を2004年10月11日から12月11日の2ヶ月をかけ、その足跡を辿って描いた36点の絵が展示されていました。モジャイスキー大尉とナターリアの絵を見比べることにより、日本の150年前の人々、風景とその現在との対比、そして日口交流の長い歴史の流れが理解できます。当時のモジャイスキーの絵は鉛筆で描かれたモノトーンの色であるのに対し、ナターリアの絵は日本を意識した淡い色彩で描かれており、この色を通して「昔」と「今」の記憶が「区別」され、そしてまた時間を越えて見事に「つながれた」新しい試みです。

3 ロシア国立サンクトペテルブルク歴史博物館

アングリースカヤ河岸44番地にあるこの博物館は、旧ペテルブルグ博物館(1907年)と市行政局(1908年)のコレクションを基に1918年に造られ、第二次世界大戦下の1941年9月8日～1944年1月27日までの900日間のドイツ軍による「レニングラード包囲」などの第二次世界大戦の記録のほか、20世紀初頭の庶民の生活の様子などが展示されています。

レニングラード包囲で家族すべてを失い、やがて疎開先で自身も亡くなった少女ターニャ・サビチュワの残したメモ「ターニャの日記」もここに保管されています。

紹介する三つ目の展示はこの博物館の常設「長崎原爆展」です。展示には長崎の原爆投下時の写真や被爆した品々とともに、第二次世界大戦下の独ソ戦の写真も展示されていました。展示室の一番目立つ所に大きくヒトラーの無表情な写真が掲げられ、その周りには空撃する爆撃機、被爆した長崎の子供達、長崎の原爆で亡くなった

ロシア人将校の肖像画や墓などの写真があり、長崎被爆の状況だけではなく、その時代背景と戦時下の国々、戦争に巻き込まれた人々の悲しみが胸に伝わりました。

これらの博物館には展示に関するパンフレットがないため、展示場の学芸員に詳しい解説を求めたところ、「ロシア語が読めるのなら、解説を読んでください」と言われただけでした。ロシアの博物館は、「親切さ」と「丁寧さ」に欠けても、あるテーマに「限定」して、主催者側が意図したものだけを訪れた人に理解してもらおうという展示の仕方と違います。限られた予算の中で優雅にそして大胆に、ある「できごと」をその時代背景、歴史の流れ、その時の世界情勢などの大きな枠の中に置き、見る人の想像力を刺激し、全体を通してものごとを理解させるような展示を意図しています。見る人がそこから自由に必要な情報を受け取り、理解を深めていくのです。つまり、それは表面と形式の完璧さをどこまでも追い求める展示の仕方ではなく、「ものごと」の本質に迫る展示方法なのです。

今回の現地調査は、理解に苦しむように高く設定された外国人料金、劣悪なトイレ事情、長すぎる昼休み時間などの旧ソ連時代の習慣がそのまま残されていること、と同時にロシアという国の歴史と文化の奥深さとスケールの大きさを体験できた調査でした。

参考文献

- Морской музей России 《ИПК Бюнт》1993
- Государственный Эрмитаж Санкт-Петербург 《Альфа-Колор》2000
- Миссия В Японию Санкт-Петербург 《Ленэкспо》2005
- www.spbmuseum.ru



エルミタージュ美術館展示風景



150年前の函館(ロシア中央海軍博物館)



「長崎原爆展」より(サンクトペテルブルク歴史博物館)

写真は全て筆者撮影。

研究会報告

W O R K S H O P R E P O R T

歴史研究と図像資料のデジタル化

孫 安石（事業推進担当者 / 神奈川大学大学院・助教授）

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究テーマの一つに「文化情報発信の新しい技術の開発」という項目がある。その具体的な内容は、非文字資料の体系化と情報の発信、そして、技術の開発をめぐる非文字資料のデータベース化とデジタル化を検討し、新たな方法論を提示することであり、その理論枠を検討するために2005年4月28日「歴史研究における図像資料のデジタル化」をテーマにしたワークショップが開かれた（<http://www.kanagawa-u.ac.jp/06/kouenkai/050414/index.html>）。

今回はとくにアジア（東南アジア、中国、日本）と関連の深い分野で歴史資料のデジタル化に関わってきた専門家に報告をお願いし、今後の神奈川大学COEプログラムのための活発な意見交換を行なうことができた。以下、そのワークショップの報告をまとめながら、歴史研究と非文字資料に関連する最新の情報などについて触れておきたい。

1 ワークショップでの報告

柴山守氏（京都大学東南アジア研究所）の報告は今までのコンピュータや情報技術を歴史、地域研究に如何に応用するかについて触れたうえ、実例として最近の地理情報システム（GIS:Geographical Information Systems）により近世日本と東南アジア諸国間の交易がどのように可視化されるのかについて紹介するものであった。¹

具体的には、タイ国のアユタヤ、スコタイ遺跡及びアンコールから東北タイを経由してスコタイに至る仏教文化の伝播をGISなどの技術を用いて復元する過程の説明がなされた。また、大阪を描いた元禄、天保時代の地図と現在の地図、そして、航空写真を重ね合わせて3次元で再現した上、琉球、ベトナムの史料を加え、12～19世紀にいたるまでの貿易ルートと文化伝播の動きを可視化する研究について紹介された。

また、手書き文字OCR技術を応用した古文書翻刻支援システムの開発は、文字認識の範囲を近世江戸時代の古

文書や現代のくずし字の読み取りにまで進んでいる旨の報告があった。従来の歴史学において豊富な研究成果の蓄積がある文字資料のデジタル化は、図像資料の体系化を目指す本学のCOEプログラムとも密接な関連があり、多くの参加者の興味を引いた。

小野守氏（コンテンツ株式会社）の報告は、歴史資料をデジタル化する際データの解像度、色深度（ビット深度）資料撮影の技術、画像処理技術の相互性が重要であることを指摘した上、宮城県図書館が所蔵するマテオ・リッチ撰「坤輿万国地全図」のデジタル化および隠岐・海士町の島全体の情報をデジタル化する過程を紹介するものであった。ZOOMERなどのソフトを用い超高精細画像データを質感や風合いまで自然な状態で再現する技術は、今後、博物館や美術館などに大きく活用されて行くことが期待される。

このようなデジタル技術によって多くの図像資料が細密に復元され、一般の人々が閲覧できるようになれば、歴史学の研究が古色蒼然たるものではなく、地域創生という現代的意味をも合わせもつ可能性があることを示唆するものであった。²

貴志俊彦氏（島根県立大学）は「北東アジア地域研究のための資料・書誌情報データベース」の国際的な拠点をウェブ上で形成する計画を進めており、すでに上海租界工部局警務処文書、北京特別市市政公報、天津史文獻目録、スタンフォード大学フーヴァー研究所中国関係アーカイブ、モンゴル人民共和国科学アカデミー刊行人文社会系学術定期刊行物記事索引などをインターネット上で公開している。本ワークショップでは、このうち戦前、日本で発行された膨大な数の絵葉書のなかで、東アジア近現代の風景、人物、出来事などを映し出す約2000点余りの絵葉書を画像データベースとして構築する試みが紹介された。とくに、貴志報告では絵葉書だけではなく、ポスター、広告、商標、画報、写真、地図、映画などのグラフィズム全般に関する研究動向が紹介され、中国、台湾、韓国における絵葉書資料の所蔵状況についても触

れられた。また、このような絵葉書の画像データの利用は従来の歴史研究では分析することができなかった様々な可能性を広げることも指摘された。³

筆者の報告は現在、画像データベースを作成中である『支那事变画報』と『写真週報』などの資料を紹介しながら、これらの画報のなかに含まれた租界関連の情報を蓄積して行く計画について触れたものであった。また、近現代史に関連する図像資料、例えば、新聞や雑誌などに掲載された写真を取り扱うとき、その他の時代とは異なり、読者は一部分の図像のみを記憶するのではなく、ページ全体が一つのイメージとして記憶されることについて言及した。近現代史の場合、人々は図像と文字が融合された新聞と雑誌のページ全体を一つの情報として記憶し、それが時代の記憶として再生産されるからである。

2 図像資料のデジタル化に向けた課題

以上、ワークショップでの報告内容を簡単に紹介した。これらの報告では、(1) 歴史資料をデジタル化する過程で一つの基準を設けることが重要であること、(2) 歴史・文化研究とデジタル化を融合させるためには狭い学際領域をのり超えた共同研究が必要であること、(3) デジタル資料の活用に関しては、これらの研究成果が一部の大学や研究機関の内部だけで利用されるのではなく、広く社会一般のための教育プログラムとして活用されるべく、新たな体制を作っていく必要があることなどがこもごも指摘された。

今回のワークショップが終わった後、ECAI(Electronic Cultural Atlas Initiative)Shanghai Conference(上海、復旦大学、2005年5月9日～13日)の「History and Visual Documents panel」に参加する機会を得た。⁴

ECAI会議はGIS技術を駆使した世界の歴史地理学研究成果と問題点を検討することを内容とし、今年の上大会議ではとくに中国史に関する地理情報のデータベース化作業について紹介があった。ハーバード大学のイェンチン研究所が進めている中国の仏教遺跡に関するデータベースと上海の復旦大学が推進する中国の歴代の河川の変貌を追跡する地理情報の集積状況の報告の他に、中国の古典経典（儒教・仏教など）をデジタル資料化する作業や言語の勢力範囲の変化を地図上に表す試みなどが報告された。

また、このECAI上海会議では歴史資料のデジタル化に向けた韓国側の取り組みが極めて活発であることを確認することができた。すなわち、欧米と日本などの場合、大

学と研究所のスタッフがECAIの会議に参加しているのとは対照的に、韓国からは大学以外にも、政府の文化観光政策を担当する関連部署から人が派遣され、自国の文化遺産に関するデータベース作業の進捗具合が報告された。

ところが、そのほかの関連報告で筆者の関心を引いたのは、Urban GIS Projectsという取り組みであった。このプロジェクトによって、ロンドンと上海、そして、東京など世界の各都市をテーマにした地理情報や図像資料の蓄積が急速に進んでいることを確認することができた。さらに、印象に残ったのは、ECAI会議でも狭い学際領域の範囲をのり超えた異分野間の交流によって新たな可能性が生まれるという考え方が繰り返し、強調されたことであった。

神奈川大学21世紀COEプログラムは2005年11月に国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」を開催する予定であると聞く。そこで提示される新たな試みは、果たしてどのような歴史研究の可能性を示してくれるか、期待したい。



ワークショップ(2005.4.28開催)の様子。



2005年ECAI上海会議の案内(ホームページ 4より)

詳細については、以下のホームページを参照。

1: <http://gissv.cseas.kyoto-u.ac.jp/~sibayama/index.html>

2: <http://www.contents-jp.com>

3: <http://gdb.u-shimane.ac.jp/neardb/top.html>

4: <http://ecai.org/Activities/shanghai2005/panel5.html>



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2005年3月～5月）

タイトル	発行所
小松 達也著『通訳の英語日本語』	文藝春秋（サイマルインターナショナル 寄贈）
中国古籍文化研究所編『中国古籍文化研究』第1号 中国古籍文化研究所 説唱文学研究班『烏金寶卷』	中国古籍文化研究所
国立歴史民俗博物館編『歴博』No.122、127、129	国立歴史民俗博物館
国立歴史民俗博物館編『東アジア中世海道』	毎日新聞社（国立歴史民俗博物館 寄贈）
香港大学アジア研究センター編 『亜洲研究中心 Centre of Asian Studies Report 2003-2004年報』	香港大学アジア研究センター
湯 泳詩作『瑞澤香江・香港巴色會』	香港大学美術博物館（香港大学アジア研究センター 寄贈）
林 亦英ほか編『南邦文物 廣東傳統工藝』 林 亦英ほか編『華容世貌 上海博物館藏明清人物畫』 黄 燕芳編『聚墨留香 攻玉山房藏中国古代書畫』 彭 綺雲編『海賢流珍 中国外鎮品の風貌』	香港大学美術博物館
『愛知学院大学文学部紀要』第34号	愛知学院大学文学会
『博物館学芸員課程 年報』第5号	桜美林大学 資格・教職教育センター博物館学芸員課程
『F-GENSジャーナル』No.3	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
COE研究雑誌『先端社会研究』創刊号 第3回国際シンポジウム成果報告書	関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム 「人類の幸福に資する社会調査の研究」
国際シンポジウム論文集	九州大学大学院芸術工学研究院21世紀COEプログラム 「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」
ニューズレター『漢字と文化』特集号	京都大学21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 漢字文化の全き継承と発展のために」
ニューズレター No.6、7	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「21世紀型法秩序形成プログラム」
国際共同研究企画セミナー報告書	B-2「市場」班
『FRONTIER NEWS』No.9、10 「統合創業の開拓」キックオフシンポジウムプログラムと資料 拠点形成概要	京都薬科大学創薬科学フロンティア研究センター 21世紀COEプログラム 「伝承からプロテオームまでの統合創業の開拓」
ニューズレター No.3	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
CIRMニューズレター No.7、8、9 平成15年度成果報告書『心の解明に向けての統合的方法論構築』	慶応義塾大学21世紀COEプログラム 「心の統合的研究センター」
ニューズレター No.4 欧文紀要 No.3	慶応義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
シンポジウム報告書『神道の連続と非連続』	國學院大學21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
研究会2004年度報告書『神道と修験道 民俗宗教思想の展開』	第 グループ「神道・日本文化の形成と発展に関する調査研究」
ニューズレター No.1	静岡大学21世紀COEプログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
『東洋学』第三十七輯	檀國大學校東洋學研究所

タイトル	発行所
「28の研究教育拠点」全拠点案内パンフレット	東京大学21世紀COE
『死生学研究』2004年秋号、2005年春号 シンポジウム報告論集 『死生観と心理学』 『DALSニューズレター』No.8	東京大学21世紀COEプログラム 「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」
ニューズレター No.3、4	東京大学大学院21世紀COE 「心とことば 進化認知科学的展開」
文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」採択記念フォーラム報告書	東京女子大学「女性学・ジェンダー的視点に立つ教育展開『女性の自己確立とキャリア探究』の基礎をつくるリベラル・アーツ教育」
言語情報学研究報告5 『第二言語の教育・評価・習得』 言語情報学研究報告6 『自然会話分析と会話教育 統合的モジュール作成への模索』	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
『史資料ハブ 地域文化研究』No.4	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
拠点形成概要（和・英文）	東京工業大学21世紀COEプログラム 「フォトニクスナノデバイス集積工学」
ニューズレター『Wind Effects News』No.6	東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター
拠点形成概要	東北大学大学院薬学研究科21世紀COEプログラム 「医薬開発統括学術分野創生と人材育成拠点」
研究報告集『Annual Report 2003』	東北大学21世紀COEプログラム 「バイオナノテクノロジー基盤未来医工学」
『JISMOR ー神教学際研究』 『CISMOR VOICE』No.2	同志社大学ー神教学際研究センター（CISMOR）
広報誌『melting pot』No.2	独立行政法人 物質・材料研究機構 若手国際研究拠点
研究報告書『2003 Annual Report』	豊橋技術科学大学21世紀COEプログラム 「未来社会の生態恒常性工学」
『科学の新しい潮流 計算科学フロンティア』	名古屋大学21世紀COEプログラム 「計算科学フロンティア」
ニューズレター『奈良と古代』No.1、2 報告集『古代日本語を読む』No.1 国際講演会資料『東アジアの古代都市』	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
ニューズレター『雙松通訊』創刊號	二松学舎大学21世紀COEプログラム 「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
CNERパンフレット	一橋大学21世紀COEプログラム 「ヨーロッパの革新的研究拠点：衝突と和解」
シンポジウム報告書『日中の文化関係を考える 相互認識の「ずれ」を中心に』	法政大学国際日本学研究中心
MKCRニューズレター No.2	武庫川女子大学関西文化研究センター 「関西圏の人間文化についての総合的研究」
国際シンポジウム論文集	横浜国立大学大学院工学研究院21世紀COEプログラム 「情報通信技術に基づく未来社会基盤創生」COE
『演劇研究センター紀要』	早稲田大学21世紀COEプログラム 「演劇の総合的研究と演劇学の確立」



主な研究活動

2005年度	研究推進会議
第1回	4月15日 (研究推進会議委員の交代、COE研究員(RA)の選考、中間評価のヒアリングの実施及び各関係調書等の提出について 他)
第2回	4月20日 (研究拠点形成費の実績報告書、中間評価ヒアリング提出資料、国際シンポジウム実施計画案について 他)
第3回	5月25日 (情報発信及び実験展示・高度学芸員養成に関するワーキンググループ編成、海外提携機関への若手研究者派遣、COE研究員(RA)の指導教授について 他)

2005年度	全体会議
第1回	5月13日(中間評価ヒアリング報告、研究拠点形成費の実績報告書、本年度研究実施計画について 他)

2005年度 研究会 (2005年4月～5月実施分)

全体

第1回・5月13日 各班リーダー/昨年度の総括と本年度活動目標について
八久保 厚志/『環境と景観の資料化と体系化にむけて』を発行して

班

- 4月4日・1班 ジョン・ボチャリ/昨年度の英文翻訳作業の経過と問題点
- 4月15日・1班 今年度の東アジア生活絵引の編さんのための図像読み取り作業
- 4月27日・2班 川田 順造/人力運搬の方法、回転道具の回転方向など、道具と身体技法についての問題提起
- 5月12日・4班 木下 慶子(工学部木下研究室)/非文字資料による情報資源と情報流通の管理
- 5月25日・1班 『常民生活絵引』マルチ言語版の編さんのための翻訳成果の検討
- 5月25日・2班 河野 通明/非文字資料体系化の方法論をめぐって

ワークショップ

4月28日 「歴史研究における図像資料のデジタル化」 (研究会報告 P.24、25参照)
主催：外国語学研究所中国言語文化専攻、神奈川大学21世紀COEプログラム
共催：神奈川大学 人文学会

司会：大里 浩秋(神奈川大学)
柴山 守(京都大学東南アジア研究所)
情報技術と歴史・文化研究 空間情報としてみる非文字資料
小野 博(コンテンツ株式会社)
非文字資料の大規模デジタルアーカイブと先端技術
貴志 俊彦(島根県立大学)
近代東アジアの文字/非文字資料のデジタル化と公開利用
孫 安石(神奈川大学)
戦争と画報 「支那事变」関連の画報と租界

主な研究活動

現地調査

(2005年1月～5月実施分)

福田 アジオ、菊池 勇夫、君 康道、金 貞我、田島 佳也、中村 ひろ子、富澤 達三 宮城県仙台市(1月21日～22日) 宮城学院女子大学、宮城県美術館、東北歴史博物館他での現地調査、 および近世・近代生活絵引きの編さんのための研究会の開催
山口 建治 奈良県奈良市・兵庫県神崎郡・大阪府三島郡(2月3日～5日) 興福寺・日本玩具博物館・伏偶舎郷土玩具資料館等での追灘行事と人形博物館の現地調査
田島 佳也 北海道 札幌・帯広(3月4日～8日) 十勝毎日新聞社、開拓記念館、北海道大学附属図書館北方資料室でのアイヌ絵の調査・収集
彭 国躍 中国 上海(3月17日～23日) 復旦大学・華東師範大学での色彩意味論に関する社会言語学術研究の実施
河野 通明 山口県岩国市・光市他(3月21日～24日) 岩国市民具収蔵庫・光市歴史民俗資料館・本郷村歴史民俗資料館他での在来農具の比較調査
小馬 徹 ケニア ナイロビ他・イギリス ロンドン他(3月20日～31日) ケニアのナイロビ市を中心に勃興している新たな混成語であるシェン語の現地参与観察調査、 および文献調査
佐野 賢治、孫 安石、中村 政則、網野 暁 福島県南会津郡(3月26日～29日) 只見町教育委員会で民俗民具資料の現地調査および資料・データ・検索化の検討
夏 宇継 中国 雲南省麗江市(4月1日～9日) 納西族の東巴・求寿儀式の調査
河野 通明 静岡県三島市・藤枝市・島田市(4月14日～15日) 三島市郷土資料館・藤枝市郷土博物館・島田市博物館他での在来農具の比較調査
金 貞我、田島 佳也、中村 ひろ子、前田 禎彦 千葉県佐倉市(5月6日) 国立歴史民俗博物館での江戸図屏風原本の見学と図像史料の処理についての聞き取り調査
北原 糸子 ロシア サンクトペテルブルク(5月16日～21日) ロシア中央海軍博物館他でモジャイスキーの「下田の情景」(1854年当時)等についての現地調査
廣田 律子 秋田県田沢湖町(5月22日～23日) わらび座デジタルファクトリーにて能楽師関根祥人氏の動きを対象にモーションキャプチャーによる デジタル資料の収録
河野 通明 長野県長野市・千曲市・小布施町他(5月26日～28日) 長野県立歴史館、長野市立博物館、小布施町歴史民俗資料館他での在来農具の比較調査
金 貞我 香港(5月26日～29日) 香港大学博物館での所蔵品(絵画中心)の見学と調査



2005年度 研究担当者紹介 (事業推進担当者・COE教員・共同研究員)

・各班リーダー(印)以下、五十音順 ・共同研究員(印) ・2005年4月現在

氏名	所属部局・役職	専門分野
福田 アジオ	歴史民俗資料学研究所 教授	民俗学
菊池 勇夫	宮城学院女子大学学芸学部 教授	日本近世史・北方史
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科 専任講師	日本民俗学
金 貞我	韓国 延世大学博物館 客員研究員	日本絵画史・東洋美術史
佐々木 睦	東京都立大学(首都大学東京)人文学部 助教授	中国文学(古典文学・幻想文学・表象論)
鈴木 陽一	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	明清白話小説史・江南地域文化
田島 佳也	日本常民文化研究所 教授	日本近世経済史
中村ひろ子	神奈川大学21世紀COEプログラム COE特任教授	博物館学・民俗学
西 和夫	日本常民文化研究所 教授	日本建築史
ジョン・ボチャリ	東京大学大学院総合文化研究科 教授 / 歴史民俗資料学研究所 非常勤講師	比較文学比較文化・日本研究
前田 禎彦	歴史民俗資料学研究所 専任講師	日本古代史・中世法制史

川田 順造	歴史民俗資料学研究所 教授	人類学
芦澤 玖美	大妻女子大学人間生活科学研究所 教授	生物人類学・成長学
落合 一泰	一橋大学大学院社会学研究科 教授	文化人類学・ラテンアメリカ研究
夏 宇継	歴史民俗資料学研究所 非常勤講師	中国民俗学
河野 通明	日本常民文化研究所 教授	農業技術史
長瀬 一男	株式会社わらび座 チーフディレクター	民族芸能のデジタル記録
廣田 律子	歴史民俗資料学研究所 教授	中国民俗学・祭祀演劇
山口 建治	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	中国民間文芸

香月 洋一郎	日本常民文化研究所 教授	民俗学
北原 糸子	歴史民俗資料学研究所 非常勤講師	日本近世・近代社会史
鈴木 廣之	東京文化財研究所 日本東洋美術研究室長	日本美術史
須山 聡	駒澤大学文学部 助教授	人文地理学(文化地理学)
富井 正憲	工学部 専任講師	建築計画・設計
中島 三千男	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近現代思想史
八久保 厚志	外国語学部 助教授	人文地理学
浜田 弘明	桜美林大学資格・教職教育センター 助教授 / COE教員(非常勤講師)	文化地理学・博物館学
三鬼 清一郎	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近世史

佐野 賢治	歴史民俗資料学研究所 教授	民俗学
青木 俊也	松戸市立博物館 学芸員 / COE教員(非常勤講師)	日本民俗学
宇佐見 義之	工学部 助教授	物理学
大里 浩秋	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授	中国近代史・日中関係史
金子 隆一	東京都写真美術館 学芸課専門調査員	写真史
橋川 俊忠	歴史民俗資料学研究所 教授	日本政治思想史
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻 教授	情報セキュリティ・著作権制御・画像工学
小馬 徹	歴史民俗資料学研究所 教授	文化人類学・社会人類学
齊藤 隆弘	工学研究科電気電子情報工学専攻 教授	画像処理・情報数理
孫 安石	外国語学研究所中国言語文化専攻 助教授	中国近代史・都市史
田上 繁	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近世経済史
中村 政則	歴史民俗資料学研究所 教授	日本近・現代史
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻 助教授	計算機科学・システム情報工学・人工知能
的場 昭弘	経済学研究所 教授	社会思想史・社会史
丸山 宏	筑波大学人文社会科学研究所 教授	中国宗教史

COE研究員紹介

氏名	所属部局・役職	専門分野
樫村 賢二	神奈川大学21世紀COEプログラム / COE研究員(PD)	民俗学
藤永 豪	神奈川大学21世紀COEプログラム / COE研究員(PD)	人文地理学
丸山 泰明	神奈川大学21世紀COEプログラム / COE研究員(PD)	民俗学・宗教学

王 京	歴史民俗資料学研究所博士後期課程 在学 / COE研究員(RA)	民俗学・日中関係史
小林 光一郎	歴史民俗資料学研究所博士後期課程 在学 / COE研究員(RA)	民俗学
土田 拓	歴史民俗資料学研究所博士後期課程 在学 / COE研究員(RA)	民俗学
彭 偉文	歴史民俗資料学研究所博士後期課程 在学 / COE研究員(RA)	民俗学
宮本 大輔	外国語学研究所中国言語文化専攻博士後期課程 在学 / COE研究員(RA)	中国社会言語学

調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく、COE調査研究協力者に今年度委嘱された方々です。

2005年5月現在

班	氏名	所属部局・職名
1	鈴木 彰	神奈川大学外国語学部 助教授
1	中井 真木	東京大学大学院総合文化研究科博士課程 在学
1	コールマン・ティモシー	東京大学大学院総合文化研究科修士課程 在学
1	金 泰順	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士前期課程 在学
1	林 淑姫	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士後期課程 在学
2	海賀 孝明	株式会社わらび座 チーフエンジニア
3	河野 真知郎	鶴見大学文学部 教授
3	津田 良樹	神奈川大学工学部 助手
3	原信田 實	国際浮世絵学会会員、2003年度神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員
3	増野 恵子	早稲田大学教育学部 非常勤講師、2004年度神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員
4	貴志 俊彦	鳥根県立大学総合政策学部 助教授
	富澤 達三	神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員、2004年度神奈川大学21世紀COEプログラム研究員(PD)

貴重資料の紹介



「The Top of the Pass between Nikkō and Lake Chūzenji」(写真左下)
Mrs. Lasenby Liberty *Japan a Pictorial Record*
(Adam and Charles Black, 1910)より



「居留地(旧横浜新田)」(写真右下)
横浜と近郊の風景写真(撮影者不詳、明治8年頃撮影)
計6点のうち1点

貴重資料の紹介

2004年度に購入した資料

2005年3月退任の研究担当者

COE共同研究員

彭 国躍 楠本 彩乃 田口 洋美 増野 恵子

COE研究員(PD)

網野 暁 富澤 達三

COE研究員(RA)

大坪 潤子 大西 万知子 中町 泰子

2005年度海外提携機関の派遣研究員・訪問研究員

本プログラムより派遣・招聘される若手研究者は、約2週間をそれぞれの研究課題にそって現地調査を実施します。今年度(前期)で選考されたのは、下記の派遣研究員2名、訪問研究員1名です。

派遣研究員

氏名: 王 京 COE研究員(RA)

派遣先: 北京師範大学

期間: 2005年7月6日~7月19日

氏名: 彭 偉文 COE研究員(RA)

派遣先: 華東師範大学

期間: 2005年9月17日~9月30日

訪問研究員

氏名: 岳 永逸(北京師範大学民俗学与文化人類学研究所教員)

受け入れ期間: 2005年7月15日~7月28日

編集後記

中間評価の結果待ち、外部評価ばかりとはいえ通信簿を待つ小学生気分の中での編集作業。箱根駅伝ではないが折返し地点での成績は後半に響く。次号より調査・研究の紹介から、その成果に基づいた論考、ワークショップやシンポジウムの内容で紙面を構成、研究の最前線の特集のような形で紹介していきたい。各研究員のサポートに期待するところ大である。

(佐野)

3年目の今年は、新しく始まる活動や、今までの研究活動の成果を発表していく節目の年です。本誌の表紙は新年度を機に気分一新、緑色に変わりました。今までの茶、青、そして今年度の緑、というように、年を追うごとに違う特色が出せるよう、これからも誌面の工夫を心がけていきたいと思えます。

(関)